

# 地蔵通り、メルヘン商店街

作 丸尾 聡

○この台本は、何度か書き直され、「かわさき演劇まつり」という市民参加型の公演で使用されたものが、今回の台本である。登場人物は、上演にあたって適宜変更してもらっても構わない。特に、「さすらいの腹話術師+ゴローちゃん」は、たまたまメンバーに腹話術師の城谷護さんがいたので加えたのである。違う人物を加えたり、カットしてもらっても構わない。

## 登場人物

○八百庄（八百屋）

板東猛（高校三年）

板東沙織（23）

板東哲（59）

板東雅美（小学生）

○北沢豆腐店

北沢真（高校三年）

北沢清（48）

北沢晶子（39）

○K&Aフラワー

キョーコ

アケミ

草脇源三

（ゲンちゃん 履物屋 草脇）

徳（コロッケ屋 徳）  
奈津唐洋二郎（36 ABマート地蔵通り店店長）

○ドラゴン亭

ラーメン屋

ラーメン屋の奥さん

竹内美佳子（高校三年 竹内書店の娘）  
林沙也加（中学生 林文具店の娘）

○ふるや（駄菓子屋）

古谷昭雄（48）

古谷あき（79）

橘敬子

岡島みち

西田浩明

坂上あきら

北沢春子（26）

新聞記者

さすらいの腹話術師＋ゴローちゃん



とき

現代。少し懐かしい感じはするが・・・

ところ

都会から少し離れた、日本のどこにでもある・・・

## 一、オープニング

サラリーマン風の若い男（坂上あきら）、都会の波の中を歩いている。  
ふと立ち止まり、ポケットからチラシを取り出す。

坂上

（チラシを見て）忘れていた落とし物がこんなところにあった・・・、夢、一緒に探しに行こう・・・（いったんチラシを丸め捨てようとするが思い直して、もう一度目をやり）地蔵通り、メルヘン商店街・・・。

この芝居のテーマ曲「walkin'」の前奏が流れ始める。メルヘン商店街に人が集まってくる。まずは、夢を見る、あるいは夢を捨てきれない奴ら。

坂上

オーディションナンバー一番。坂上あきらです。ダンス歴なし。

みち

二番、岡島みちです。二十年振りです。頑張ります。

敬子

橘敬子、三番。特技は、特技は・・・特にありません。

浩明

西田浩明。人生三二年、腕試しにやってきた。

続いて、商店街の子どもたち。現れる。歌い、踊り出す。

「walkin'」 The show—天 guys デビュー曲

let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin`

仕方ねえ なんてことないよね

流されたって楽じゃねえ

時には立ち止まってオーケーさ

でも だが それでも そしてさ let`s walkin`

やがて 歩きだそう 胸いっぱい

いつまで? どこまで? 明日まで

星が流れる場所まで

let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin`

坂上、みち、敬子、西田らも加わる。

あとどれくらい どこまで行くのか

人の波 今日も明日も繰り返し

でも顔を上げ 止まらない 風を両手で抱きしめて

吹かれていこう 世界を回れ around the world

let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin`

やれること ないなんて言わせない

出来ることしかできやしねえ

仲間がいるから救われた

でも だが それでも そしてさ let`s walkin`

やがて 歩きだそう 胸いっぱい

いつまで? どこまで? 明日まで

月が微笑んでる場所まで

let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin`

涙こらえて いいじゃないか

海の底 涙も汗もわからない

飛ぶんじやない 走るんじやない 風を両手で抱きしめて

歩いていこう 世界を回れ around the world

let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin`

I`m walker you`re walker

let`s walkin` 歩いていこう

let`s walkin` 何も持たずに

let`s walkin` 歩いていこう

let`s walkin` 両手をフリーに

let`s walkin` 歩いていこう

let`s walkin` わき目もふらずに

let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin`  
let`s walkin` let`s walkin` let`s walkin`  
let`s walkin` 夜を越えろ

さすらいの腹話術師、相棒、ゴローちゃんと登場。

ゴロー　ねえ、なにか楽しげな声が聞こえてくるよ。

腹話術師　じゃあ、ゴローちゃん、一緒に行ってみようか。

ゴロー　そうだな、仕事もないし。

腹話術師　それを言うなよ。

商店街の人々が、踊り歌う皆を見つめる。

## 二、商店街の危機にアイドルグループ売り出しを決めること

ここは「地蔵通り商店街」の倉庫兼詰め所。で、今、商店街の人たちが、集まってきている。そこにギターを抱えて飛び込んでくる奈津唐洋二郎。コンビニの制服を着ている。

奈津唐　いやあ、遅くなりました。もう、忙しくて忙しくて。みなさんは、相変わらずの様子ですねえ。

哲　黙ってろ、奈津唐屋。



奈津唐 はい？ おまけにもうひとつ、はい？

哲 ああ？

奈津唐 奈津唐屋はないでしょう。

哲 おめえ奈津唐屋じゃねえか。

奈津唐 奈津唐屋は、親父がやっていた酒屋の屋号。今、私が店長をつとめているのはコンビニエンスストアー、A B マー ト 地 蔵 通 り 店 だ。わかりましたか、八百屋の哲さん。

哲 ちえ。親父の店を勝手にコンビニにしたくせによ。

奈津唐 なんだと。

アケミ はい、どうぞ。

アケミ、奈津唐屋にお茶を出す。

奈津唐 アケミさん、ありがとう。あなたの店の花のように、相変わらずお優しい。感謝、もう一つおまけに、ほれちやいそう。

アケミ 奈津唐屋さん。

奈津唐 うん？

アケミ 相変わらずうるさいわね。

キョーコ 奈津唐さんが、お父さんになったらどうなるのかしら。

アケミ キョーコ、そんなことは絶対にならないわよ。

キョーコ そうだよねえ。

奈津唐 ぎやふん。

清　じゃ、皆さんお集まりのようだし、そろそろですかね。

哲　ちよっと待てよ。これだけかよ。

清　ええ。連絡頂いた方もいますが、やはり時間帯もありますし。

哲　それぞれ都合があるから、今回は昼の時間帯で集まることになったんだろ。

オレだって、都合つけてんだから。

奈津唐　わざわざ都合つけるほど忙しいんですか？

哲　なんだと？！

アケミ　まあまあまあ。

草脇　（寝ていたが目をさまし）前回の集まりは、・・・夜。夜、だったかにや？

哲　まだわけえのに、可哀相によ。

キョーコ　ゲンちゃん、前は夜だったよ。

草脇　（可愛く）僕のおじいちゃんの頃はね、夜でもお店を開けてたんだ。いっぱ

いお客さんがきてたからあ、それでなんだ。ふふ。

奈津唐　やばくない？　話は聞いてたけど。

アケミ　ゲンちゃん、お客さんが全然来なくて……

哲　ゲンちゃん。寝てて大丈夫だから。な、・・・ゲンちゃん？

ゲンちゃん、寝ている。

哲　もう、寝てるじゃねえか。

清　寝かしときましょう。

草脇　まだ、起きてる。（といきなり起きあがる）

哲 わあ。（と驚く）

清 まあ、とにかく地蔵通り商店街の役員会議を始めたいと思います。

拍手。

奈津唐 商店街会長！（会長は清のこと）

清 はい、洋二郎君。

奈津唐 奈津唐洋二郎、地蔵通り店長です。

哲 バカ。

アケミ はいはい、意見をどうぞ。

奈津唐 確かにこの通りは地蔵通りですが、商店街は地蔵通り商店街ではなく、地蔵通り……

キョーコ メルヘン商店街。

奈津唐 （遮られたのでむっとするが）でしよ。正式名称は地蔵通りメルヘン商店街。

哲 どっちだっていいじゃねえか。

奈津唐 よくないですよ。そういうことをきちっとやっていこうって、僕ら役員になったときに話したじゃないですか。

清 実は、その辺りのことも含めて話したいんだけど、とりあえず、地蔵通りメルヘン商店街役員会議を始めます。

奈津唐のみ盛大に拍手。

アケミ 今日は、秋の売り出し計画とお祭りについてですよ。

清 うん・・・。

奈津唐 祭りか。今年も歌いますよ。♪夏が過ぎ風あざみゝ

清 奈津唐君の歌は、例年通り歌ってもらおうとして、

奈津唐 任せてください。

哲 去年はよ、ひでえ目にあったぜ。

奈津唐 (嬉しそうに) ああ。

清 あれかぶって商店街を歩いたんですよね。

哲 絶対人気が出るとかだまされてな。その大元のアイデア、なんだっけ、ええ、ピンクのメルヘン地蔵祭り。あの企画は誰が考えたんだよ。

### みな奈津唐を見る。

奈津唐 や、やだなあ。それは、それはですよ、みんなで話し合った、若い女性や子どもにいかにかこの商店街に足を運んでもらうか、というところから、メルヘンというコンセプトが生まれ、それまでのイメージである地蔵と結びついて「メルヘン地蔵」というアイデアが生まれたわけですよ。

キョーコ 商店街中に、ピンクの地蔵が建ちましたね。

アケミ 赤、白、青のトリコロールカラーの提灯。

清 地蔵まんじゅう、地蔵ケーキくらいはよかったけど、

アケミ 地蔵ステッカー、地蔵エプロン、地蔵アイスなんてのもあったわね。

哲 オレのところじゃさ、仕方ないから、蕪を頭にして、胴体がナスで足がミョウガ2個っていう地蔵セット作らされてさ。

皆 （少し考えて） ああ。

アケミ 売れたんですか。

哲 売れるわけねえだろ。

アケミ ああ、うちは結構売れたんです。ミニチュア地蔵がかすみ草とムラサキツユクサのかごを背負ってるっていうキョーコのアイデア。うちのK&Aフラワ―は、キョーコのアイデアで持ってるから。

キョーコ ありがとう。お母さん。

清 たしかにキョーコちゃんはセンスあるよね。

キョーコ お花のこと好きだから。

清 え。

キョーコ じつと見てると思ひ浮かぶんです。好きだから。

草脇 （いきなり） 僕も草履や下駄や雪駄が大好きなんだけど、全然売れなかったよ、地蔵草履。

皆 ……

清 うちも地蔵豆腐っていう黒胡麻豆腐売り出したけどまったくダメでした。  
アケミ なんで地蔵豆腐なの。

清 色が灰色だったんで。徳さん、徳さんところはもうでしたっけ？

徳 うちは、コロッケ一筋。ほかのもんはなーんもやらん。ていうかできん。

奈津唐 地味な商売ですよ。あれ、一個売っていくらになるんです？

徳 いくらでもよからうが。

奈津唐 唐揚げだの、天ぷらだの売ったらいじやないですか。そうそううちのホットホットチキン結構出ますよ。

哲 バカ。

奈津唐 バカっていうほうがバカ。

哲 徳さんの偉さがおまえにはわからねえのか。

奈津唐 わかりませんねえ。

哲 ああ、親の遺産でコンビニの権利買うやつにやあ、わからねえだろうな。

奈津唐 キー。そう言うこと言ってるからね、この商店街は閑古鳥が鳴くんでしょ。ちなみにうちは儲かってますけどね。

徳 ふん。

アケミ いくら売り上げがあるんですか？

奈津唐 一日平均、42万5千362円。

**徳立ち上がる。倒れる。皆で支える。**

清 奈津唐君、あんまり徳さん刺激しちゃダメだよ。

キョーコ 大きい数字慣れてないんです。

奈津唐 とにかくですね、うちは困ってるわけじゃないのに、この商店街のためだと思っ  
て、いろいろとアイデアを出してるわけですよ。そこんところわかってほしいなあ。

徳 ああ、あなあ。なんで地蔵がピンクになったり、女子どもが喜ぶものになったりする。

奈津唐 はい？

徳 わしはうまくいえんが、地蔵は地蔵でいいじやろが。

清 そうですね。今の徳さんの話、それからさっきのキョーコちゃんの話、僕が今日提案しようと思ったことに、すごく通じるんです。

哲 どういうことだよ。

清 僕もうまく言えないんですが……この商店街にいて良かったな、って思えるっていうか、この商店街があつて良かったな、って……

キョーコ 好きだから。

清 そうです。

哲 どういうことだよ。

清 誇りの問題じゃないかと思うんです。

奈津唐 ほこり。

清 いやいやそのほこりじゃなくて。徳さんのコロッケ一筋の心意気みたいな。

草脇 誇りか……。つまりは客にこびすぎたと言うことですか。

アケミ ゲンちゃん、戻ったの。

草脇 ご心配なく。ご心配なく、だにや。

キョーコ 長くは続かないのね。

清 ゲンちゃんのいうとおり、みんな、ほんとに去年メルヘン地蔵祭りなんて、やりたかったんでしょうか。そんな人いたんですか。

奈津唐がおどどと手を挙げる。

清 例外はともかく。なにも、ピンクの地蔵が悪いと言ってるわけじゃない。あ

れだつて、例えばお金をかけてうまく宣伝すれば、ほらテレビでよくあった  
じゃないですか。売れない商店街やお店に芸能人が来て立て直すみたいの。

哲 ああ。

徳 くだらん。

清 でも、商店街にそんな予算やコネがあるわけじゃない。素人だし。実は代理  
店みたいなところにも相談したんですけど、予算を聞いたらとてもとても。

アケミ わたしたちに出来ることで、お客にこびずに、わたしたちが誇りを持てる、  
ええ、しかもお金のかからない企画？

清 そうです。

キョーコ なんだろう？

清 実はもう一つ話があります。あの「アーバン」がこの街に来ることがどうや  
ら本決まりのようです。

哲 アーバンってなんだよ。

奈津唐 アーバンて、あの海外資本のショッピングセンター？

清 ええ。生活用品、食料品、衣服、すべてがそろう大型店です。

哲 そりゃ困るよ。ただでさえ寂れた商店街が、困るって。

アケミ どこへ出来る予定なんですか。

清 地蔵広場。



草脇 あそこは、吉沢さんのところの持ち物じゃないか。

アケミ ゲンちゃん。

草脇 大丈夫だ。

清 先代の吉沢さんがなくなって奥さんも長いこと入院してますし、息子は東京でしょう。駅前の不動産屋を通してアーバンと話ししてるようです。不動産屋がわたしの同級生で、聞きました。

草脇 アーバンには、草履も売ってるのか。

清 売ってます。

草脇 大事だ、にやわん。

清 アーバンにお金や力で対抗するのは難しいです。ですから、

キョーコ 誇りを持てる、もの。

清 この商店街から送り出すんです。

アケミ なにを。どこへ。

清 show

哲 しょう？

清 天—guys

草脇 テンガイズ？

清の女房、晶子やってくる。

晶子 あ、あんた。

清 どうした晶子。

晶子 地蔵広場に、サングラスかけた男の人がいるんだけど、  
清 うん。

晶子 その人、昭雄ちゃんじゃないかと思うのよ。

キョーコ 昭雄ちゃん？

清 そうか。来てくれたか。

晶子 ええ。

清 みなさん、切り札が来てくれましたよ。帰ってきた！

哲 ど、どうしたんだよ。

清 ちよつとすいません。迎えに行つて来ます。

奈津唐 ちよ、ちよつと。

清 晶子、歓迎会の準備を。

晶子 はい。

清、行こうとする。

キョーコ あの、さっきの何ですか。

清 え。

キョーコ ショウ、テンガイズ？

清 ああ。地蔵通りメルヘン商店街がプロデュースして全国に発信するグループの名前です。デビューは秋祭り地蔵広場。アイドルグループですよ。それじゃ。

清、行く。

哲 アイドルグループ？

アケミ 地蔵通りメルヘン商店街でプロデュース・・・

奈津唐 全国発信・・・って、オレ店あるし。この年でアイドルかア。

哲、ばしっと奈津唐をたたく。徳さんが、発作。皆、慌てる。その中で、

キョーコ でも、ちよつと素敵かも・・・。ショウテンガイズ。The Show—天 guys

皆、右往左往しつづける中で転換。

### 三、古谷昭雄の帰省のこと

地蔵広場。サングラスに旅行鞆の男が立っている。古谷昭雄（48）である。清やってくる。

清 昭雄ちゃん？！・・・

昭雄 （清の方を向く）

清 昭雄ちゃん。

昭雄 清か。

清 ああ。やっぱり昭雄ちゃんだ。（抱きつく）会いたかったよ。  
昭雄 よせ、よせよ。

と、ラーメン屋ドラゴン亭の奥さん、出前の途中で通りかかり、二人の様子を見て驚き勘違いして行く。

昭雄 おい、おい、ちよつと待てー。誤解したまま行くな。離せ、清。  
清 つめてえこというなよ。久しぶりにあったんだから。昭雄ちゃんー。

とまた抱きつく。そこへ顔を覗かせたドラゴン亭の奥さんまたもや目撃する。そして去る。

昭雄 おいー。

清 昭雄ちゃん、垢抜けたなあ。

昭雄 え？

清 決まってる、つーのか。ブランドもんか。

昭雄 ああ。

清 やっぱり業界人って感じだな。

昭雄 こんなのは東京じゃ普通だよ。

清 いや、やっぱり、昭雄ちゃんは昭雄ちゃんだ。かつこいい。子どもの頃から、オレたちのリーダーだもんな。

昭雄 ……

清 久次や弥太郎にも、昭雄ちゃんが久しぶりに帰ってくるからって、声かけた

んだけど、みんな忙しいらしくて。ごめん。

昭雄　　なんで清が謝るんだ。それにもうみんなこの商店街にはいねえんだろ。

清　　ああ。オレだけだ。

昭雄　　関西の大学行ったんだっけ。

清　　ああ。で帰ってきた。

昭雄　　しかし、清はかわんねえなあ。

清　　恥ずかしい。

昭雄　　おまえも少しあか抜けろよ。商店街会長。

清　　身にあわねえことさせてもらってるんで大変だ。昭雄ちゃん。

昭雄

清　　この度は、忙しい中、地藏通り商店街・・・、いやもとい地藏通りメルヘン

商店街に、

昭雄　　なんだそりゃ？

清　　説明は後にして、メルヘン商店街に、お忙しい中お帰り下さり本当にありが

とうございます。昭雄ちゃん、ほんとにありがとう。

昭雄　　一応、仕事だからな。

清　　ああ。昭雄ちゃんが、東京で音楽プロデューサーになったって話し聞いてな、

ぴかんと思いついたんだ。なんつったって、昭雄ちゃんは、この商店街の出

身なんだから・・・

昭雄　　なあ、大丈夫なのか。

清　　なんだ？

昭雄　予算だよ。予算。

清　　ああ。

昭雄　なんにせよ、こんな貧乏商店街だ。相場とはいわねえけどさ、やっぱり仕事

だからさ、それなりには・・・

清　　電話で話した分はなんとか。

昭雄　そうか。

清　　無理してもらって。もうバンドの方は自分じゃやってねえのか。

昭雄　ああ、教えたり演出したりプロデュースしたりで忙しくてな。

清　　ほんと忙しいところ、わざわざ、

昭雄　いや。ついでだよ、ついで。なに、隣のホールでさ、Q Pガールズのコン

サートがあるんで、

清　　Q Pガールズの面倒もみてんのか、昭雄ちゃん。

昭雄　ん、うん。まあ、な。

清　　やっぱり昭雄ちゃんに頼んでよかった。オレなんか、なんもかわらねえけど、

昭雄ちゃんならこの商店街変えるきっかけつくれるかもしれないねえ。な

あ、この地藏広場覚えてるか。ここで久次や弥太郎たちとしょっちゅう遊んだな。

昭雄　そうだったかな。

清　　昭雄ちゃんは番長で、みんないうこと聞いて、昭雄ちゃんが、あの哲さんの

八百屋からスイカ盗めっていったら盗んだし、

昭雄  
ははは。

清  
それで、たまたま居合わせた松ノ湯のまっちゃん、オレたちしかりとぼして、次の日復讐だーってみんなで銭湯に行つて、オレンジジュースの原液湯船の中でぶちまけて、さつと帰つて、湯船全部オレンジジュースになったり、（笑いながら）それは、それはないだろう。

清  
あと、向こうの住宅街の剛が生意気だつて、みんなでぼこぼこにしてロープで縛つて……

昭雄  
おい、待てえ。ちよつと待てえ。それはやってないだろ。

清  
あ、そうか。とにかく、ここが本拠地でな、この地藏広場からいろんなところに出撃したさ。なつかしいね。

昭雄  
・・・

清  
今でも祭りはここだよ。それで、ここにアーバンが来る予定なのさ。

昭雄  
（一瞬反応するが）関係ねえ。

清  
おふくろさんのところもう顔出したのか。えれえ、喜ぶぞ。

昭雄  
・・・

清  
・・・おめえ、まさか連絡もしてねえんじや。

昭雄  
おい。おめえ？ 清、偉くなつたなあ、おまえ。誰に向かつて物言つてんだ。

清  
ごめん。だけど、おふくろさん、駄菓子屋しめてからめつきり老け込んでな、うちの嫁も心配して・・・

昭雄 黙れよ。

清 ごめん。

昭雄 かわらねえな。

清 え。

昭雄 おまえも、ここも、なんもかわらねえ。

清 かもしれねえな。

昭雄 ちっ。

清 かわらねえから、・・・どうなんだ。

昭雄 オレはな、それがいやでここを出たんだ。

清 変わろうとしたって変われねえもと、変わろうとしねえから変わらねえもんがあるんじゃないかな。

昭雄 ・・・

清 だけど、この広場も今になって見りやちいさいなあ。な、昭雄ちゃん。さあ、みんな待ってるからいこうや。

昭雄 みんな待ってる？

清 とりあえず商店街の役員会で歓迎会を予定してるから。

昭雄 やめてくれよ、そういうの。

清 なにいつてるんだ。これは来るべき大事業のための顔あわせ兼打ち合わせだつて。な。

昭雄 ああ。



清 さあ、行こう。

昭雄 ああ。

清 行こうって。

昭雄 行くよ。

清 何してるんだって。早く、行こう、行こう。

昭雄 ちよつと待てよ。

などとぐずぐずしている昭雄と清がもみあっていると、またラーメン屋ドラゴン亭の奥さんが、今度はわざわざ旦那まで連れて見にくる。ふたり「やっぱり」というようにうなづく。

昭雄 違う。違うって。おい。おい。誤解するな。どういう商店街だ、ここは。お

いおい。

清 さ、早く早く。

などばたばたしている様子を、ラーメン屋の夫婦、ますますいぶかしげに見つめる。

#### 四、商店街キッズの憂鬱

板東猛（八百庄の息子）が、倉庫兼詰め所にやってきて、スマートフォンでゲームをしながらハンバーガーを食べようとする。倉庫の奥からピンクの地蔵の面をかぶった奴がひよいと顔を出す。北沢真（北沢豆腐店の息子）である。

地蔵

はははは、板東猛、なにをこそそとやっている。

猛

はい？

地蔵

オレの名は、ピンク地蔵。悪を倒し、正義を司る、ピンクの地蔵見参！

猛

おまえ、馬鹿？

戦いはじまるが、猛はいまいち乗らない、乗らない中つきあうが、最終的には地蔵やられる。ピンクの地蔵やられ、奥にいつてよろめき「覚えていろよ、私は必ず復活する」「爆発」するところでおしまい。

真

（ピンクの地蔵面を脱ぎ捨て何事もなかったように）おい、猛、ピンクの地蔵、強かったなあ。

猛

（バシッと叩き）真。

真

だから、ピンクの地蔵・・・

猛

（バシッと叩き）真。

真

だから、ピンクの地蔵は、

猛

（バシッと叩き）あのだ、もうガキじゃねえんだからさ。こういうの、やめ

真

ようよ。オレたちいくつだ？

真

高校三年です。

猛

ほんとです。

真

自分だってそれなりに乗ってやってたくせにさ。鍵ちゃんとしめたかよ。

猛

ああ？

真

最近親父がさ、なんかここでオレたちが遊んでるの疑ってるみたいでさ。

別に悪いことしてるわけじゃないし、いいんじゃないの。

悪いことすつか。

酒にタバコか。

あんまり興味ねえな。普通じゃん。

(とゲームを再開)

そのゲームおもしろえ？

別に……。

じゃ、お、女。

美佳子、美佳子、愛してるよ。

やめろって。

愛してる、愛してる、君のこと考えると夜も眠れない、美佳子、美佳子……

やめろ、ほんとにやめろって。おい、猛！

まじになるなよ。

うん……。

なんか、

真・猛  
おもしろえことねえかなあ……

あーやだやだ。

なにが。

真 猛  
なんかよ、将来面白いことがあるかもしれない、って展望がみえねえんだよ。  
ひねた高校生だなあ。前途有望な少年少女の一人なんだからもつと夢を語れ

じゃ、お前が語れ。

ほれ、早く。どうした。

なんもねえくせに。

・ ・ ・ ほんと、なんかおもしろえことねえかなあ。

あー。（とハンバーガーをばくばく食べ出す）

また、ハンバーガーかよ。

わりいかよ。肉だよ、肉、肉。

いくらうちが八百屋だからって、そこまでかあ？

おまえには、オレの苦しみはわかんねえよ。

オレだって、家の豆腐や油揚げよく食べるけど、別に嫌じゃないぜ。

おまえんちは、豆腐しか食べないわけじゃねえだろ。うちはそうじゃねえん

だつて。

どういふことだよ。

まあ、見てみるよ。

あれ、あれ、お前の姉ちゃんじゃねえか。

うん。あれが親父以上にうざいんだよ。

っていうか、何で暗くなってるんだ。

回想シーン用の明かりになってます。猛の姉、板東沙織が八百屋の格好で登場している。

猛 今から回想シーンだから。

真 なんだよ、回想シーンで。

猛 うーん、約五年くらい前な。中学入り立ての頃。

真 だから、ありえないって。

猛 じゃ、行つて来るわ。

真 行くなよ。おい。

猛、回想シーンに参加する。仕方なく見ている真。

沙織 猛！

猛 姉ちゃん・・・

沙織 あんた、また隠れてそんなの食べて。夕ご飯食べられなくなるでしょ。

猛 ・・・・今日の夕飯なに？

沙織 今日はね、カボチャとピーマンの煮物。うまく出来たわよ。

猛 それから。

沙織 ニンニクの芽のオカカ和え。

猛 ・・・・

沙織 それから、キュウリとリンゴとトマトとインゲンのサラダ、里芋にっころがし、小松菜とジャガイモの味噌汁、あ、そうそう、しめじしいたけえのきまいたけの豪華キノコオリーブオイル炒めがメインの予定。

メインじゃねえよ。

メインは、魚とか肉だろ。それに、動物性タンパク質、オカカだけじゃん。

いいのよ。

毎日毎日野菜ばかり食ってられっかよ。

なに！家が八百屋なんだからあたりまえだろ。野菜は生ものなんだから、危

なくなったら惣菜にする漬け物にするそれを売る、それでも余れば家で食う。

それがやなの。

商売人の常識でしょ。

姉ちゃんは、それでいいのかよ。たまにはジャンクなもの食いたくならない？

ならない。

姉ちゃん、オレと立っているところが違う。短大生のくせに、八百屋っぽす

ぎるよ。

(断定的にあたり前のこととして) だって、八百屋だもん。

あー(と叫んでハンバーガーを食べる)

こら。肉なんか食べなくなつてね、人間は生きて行けるのよ。野菜食べてれ

ば大丈夫なんだから。菜食主義ってのはあるけど、肉食主義ってないでしょ

う。姉ちゃん、短大で栄養学勉強してるんだから、間違いないって。

ライオンは。

ライオン？

ライオン？

猛 ライオン、肉しかくわねえだろ。

沙織 え。

猛 ライオンが野菜くうかよ。でも健康そうだが、ライオン。

沙織 食べてるの。

猛 え。

沙織 食べてるんだって、野菜。ライオン。

猛 うそ。

沙織 ライオンも隠れてね、ブロッコリーとか人参とかニンニクとか、良さそうなもの選んで食べてる。

猛 なんでライオン隠れて食うんだよ。

沙織 そりゃ・・・ライオンも意地があるから。

猛 嘘つけ。

沙織 ほんと。時々うちの店にも買いに来るし。

猛 あー。やめてくれ。

沙織 あ、ライオンだー。いらつしやい。

と沙織退場。照明も戻って。

猛 と、こういうわけなんだよ。

真 どういうわけだよ。

猛 オレのこれまでの人生だよ。

真 だから、おまえ高校生だろ、人生これからだよ。

真 猛

ほんとか、ほんとにそうか。  
なんでだよ。

猛の父、板東哲、八百屋スタイルで登場。店で野菜を売っている姿が浮かぶ。「へい、いらっしやいらっしやい。今日はキャベツ、キャベツ、春キャベツが安いよ。いらっしやい、いらっしやい……」  
そんな父の様子を見ながら、

真 猛

明日、第一回の進路希望調査だろ。

真 猛

ああ。なんだよ、大学いくんじゃねえの？

真 猛

うん。

真 猛

じゃあ、いいじゃん。成績で行けるところいきや。金かかるところはいけね

真 猛

えし、すげえ一流は無理だし、だいたい決まってるじゃん。

真 猛

おまえも夢がないね。

真 猛

だって、そんなもんだろ。

真 猛

でもよ、あの父ちゃん見てたらさ。オレ、なんか……

真 猛

なんだよ。

真 猛

大人になったら、どうなんのかなって。

真 猛

え？　なんだそれ。

真 猛

だから、大学出ても結局八百屋になって、残り物で夕飯食うのかな、毎日。

真 猛

考えすぎじゃねえか。

哲 真

さあ、奥さん、持ってたって、持ってたって。大負けに負けて、三つで、いや四

つで、その値段でいいや、持ってた、泥棒！　余ったら、今日のうちのおか



ずにしかなんねんだから。

沙織

(出てきて) もう、父ちゃん、うちの家計をばらさないでよ。

哲

あ、そうか。

二人、ギャハギャハと笑う。それをみて猛たまらなくなり、

猛

ウオー。(と頭を抱える) オレには八百屋の血が流れているんだあ。

いつの間にか哲と沙織はいない。回想シーン終わって。

真

考えすぎだつて。

猛

そうだよな。

真

うん。

猛

オレって、将来何やりそうに見える？

真

将来？

猛

ああ。なんかいろいろあるだろ、職業。

真

うーん？ あ。

猛

なんだよ。

真

八百屋。

猛

ウオー。(と頭を抱える)

真

おい、おい、猛。ほんとはな、(耳元で) 八百屋。

猛

ウオー・・・真。

真

なんだよ。

猛 美佳子。

真 やめろって。

猛 美佳子美佳子。

真 まじやめろよ。八百屋。

猛 ウォー。

「美佳子」「八百屋」と言い合う、二人。沙也加現れる。

沙也加 あんたたち！

猛 沙也加・・・

沙也加 格好悪いわよ。男のくせに。ちゃんとしな。

真 中学生に怒られた・・・。

二人落ち込む。

猛 沙也加のくせに。

沙也加 なによ、沙也加のくせにつて。

真 沙也加のくせに。

沙也加 男のくせに。

二人やりこめられ、うなりながら、「つまんねえ」「ダメだ」「おもしろくねえ」など。沙也加あきれて二人を見ている。

## 五、歓迎会で奈津唐燃えること

暗闇にギターの音が響く。弾き語りをしているのは奈津唐。曲は例えば「チャンピオン」(アリス)。倉庫兼詰め所にいるのは、他、ゲンさん、徳さん、キョーコ、アケミ、哲、沙織、清、清の奥さん(晶子)など。昭雄は少し離れて携帯で電話をしている。皆は、もう酒が入っていて騒がしい。昭雄の歓迎会。

昭雄

(電話で)・・・ええ、忙しいのはわかってます。でも、もうしばらく帰れそうにないですよ。え、帰ってこなくていい？　ちよ、ちよっと待ってください。お願いします。なんとかしますから、はい、はい、すいません・・・

ラーメン屋の奥さんが出前にやってきて、ぎょっと昭雄を見る。違うと手を振るが、誤解はとけない。

奥さん　こんばんは。ドラゴン亭です。

キョーコ　待ってました。餃子10人前。おいしいんだよね。ドラゴン亭。

アケミ　あ、この前、雑誌の記事見ましたよ。ラーメン。

奥さん　ああ、ありがとうございます。どちらおきましようか。

晶子　じゃあ、こっちに置いてもらいましようか。

奥さん　はい。

哲　しかし、これでよ、アーバンが来ても、行けるんじゃないか。

ラーメン屋の奥さん、アーバンという言葉に反応する。

清

哲さん、そういうもんじゃないって。さつきもいったようにこのプロジェクト

トは、なんていうかな、商店街の結束を高めるためにさ・・・

奈津唐 (ようやく歌い終わった。電話をしている昭雄に) 昭雄さんー、昭雄さんー、

あ、いたいた。もう、こっちに来て飲みましょう。

沙織 奈津唐屋。

奈津唐 奈津唐屋じゃねえって。親子そろってよ。

沙織 はいはい。でも、あの昭雄さんってプロだったんでしょ。もうその人の前で

恥ずかしげもなくよく歌うわ。

奈津唐 いいじゃないですか。(と酔っている)

草脇 そうだよ。昭雄は、東京で、バンドやってて、CDまで出したんだよな。

昭雄 ええ、まあ。

アケミ ゲンちゃん大丈夫なの。

草脇 昭雄が帰ってきたんだ。もう大丈夫だって。

哲 今じゃ、音楽プロデューサーってんだから、こりや都合が良かった。

沙織 父ちゃん、都合がいいはないでしょう。

哲 あ、そうか。

アケミ でも、ほんとにそうですよね。アイドルグループを作ってデビューさせるなんて、私たち見当もつかないし、代理店？とかプロダクションに頼んだら、すぐお金かかるんでしょ。ね、昭雄さん。

昭雄 宣伝費入れたら、億は、すぐですね。

徳 億！

徳さん、立ち上がる、倒れる。みんなで介抱する。苦しげな息の中から。

徳　ほんとにそのこの商店街がその歌手を、デビューさせることが出来るんだろうか。

皆、一瞬戸惑う。

哲　だから、昭雄が来てくれたんじゃないか。

徳　いや、わしは、毎日毎日その一個売っていくらにもならん、コロッケあげて  
るだけのことで、だから良くわからんのだが……

哲　金のことなら、昭雄のほうで、その億のウン百分の一でやってくれるってんだし、

徳　金のことじゃないんじゃない。ピンクの地蔵と、どこが違うか、まだよくわからないのじゃ。

晶子　アーバンって本当に出店するのかしら。もし来ないんだったら……  
清　晶子、そうじゃなくなてな……

ラーメン屋の奥さんがまだいた。

奥さん　あ、あ、つい長居しちゃって……、失礼します。

奥さん行く。

草脇　オレ、徳さんの意見、わかる。

清

あの、この前話したこと覚えてますか？ オレは、この商店街にいて良かったなって思えば、がんばれるんじゃないかって。何やったって、それで一時的にお客が増えたってそれだけじゃ……。なんで、なんでアイドルグループかって言われると困るけど、それこそ、こいつが、昭雄がいたから、地元の、商店街出身のこいつがいたから出来るんじゃないかって……。アーバンが来るにせよ、来ないにせよ、どっちにしてもこの商店街、どうかしなきゃいかんと思う。

草脇

一時的にだって増えれば、ほんとに助かるって、思ってるところ多いんじゃないかしら。

晶子

清

それは、そうだけど……

草脇

林文具店な、今月でしめるそうだ。

清

やっぱりだめでしたか。

草脇

うん。

晶子

中学が、向こうへ移って統合されましたからね。それから、よく頑張りましたよ。ご夫婦で、ほんとに。

清

おまえ、同級生だったものな。

晶子

沙也加ちゃんも店番してね。二人で注文取りに回ったり。

哲

ああいう店は、学校とかの大口がなくなれば、一発だなあ。

晶子

明日は我が身ですよ。

板東雅美（小学生）が泣きながら、美佳子（高校生）、沙也加に連れてこられる。

晶子 沙也加ちゃん。

美佳子 こんばんは。

晶子 美佳子ちゃんも。

沙織 雅美、どうしたの。

雅美 お姉ちゃん……

哲 おいおい、なんで泣いてんだよ。父ちゃんにいつてみる。お。

沙也加 雅美ちゃんの家に行ったら、誰もいなかったんで……、

美佳子 ええ。そうしたらラーメン屋のおばさんがここだって教えてくれたんで連れてきたんです。

哲 ありがとよ。

沙織 でも、猛がいたでしょう。

雅美 お兄ちゃんいなかった。

沙織 あいつ、またあそんでんな。

沙也加 当てにならないんだからあいつら。

沙織 え。

沙也加 あたしと美佳子さんが地藏広場にいったら、雅美、泣いてたんだ。

美佳子 うん、それで沙也加がどうしたのって聞いたんだけど……。ねえ。

沙也加 うん……

哲 だから、どうしたっていうんだよ。

雅美 雅美、「つぶれそうな商店街の子ども」なの？

哲 え……

沙織 だれ？ 誰がいったのそんなこと。

草脇 そ、そうじゃ。

雅美 実君がいった。

沙也加 実って、駅前商店街のスーパーの子どもなんだ。この前も変なこと言うから  
ちよいとおどかしたら、私らには言わなくなっただけ。

草脇 「いしい」の息子か。

美佳子 それで雅美ちゃん、そんなことないって言ったらしいんですけど……、あ  
の……。

沙也加 実、お父さんやお母さんがそう言ってるって雅美に……

哲 ちつくしう。（と飛び出そうとするが、皆に止められる）は、離せ、離せ。

沙也加 でも、うちの店つぶれちゃったし……ほんとのことだから仕方ないかも。あ、  
オジさんのところは、違うかもしれないけど……。ごめんなさい。

雅美 今日学校に持ってた、ふれあい弁当、売れ残り入れてきただろうって言わ  
れた。

沙織 ……。ごめん。ほんとに売れ残りで。

キョーコ （突然大声で）あー。

アケミ キョーコ……

キョーコ なんだか頭に来る。



ラーメン屋の奥さんが旦那を連れてくる。

奥さん あのこと。

晶子 あ、まだ食べ終わってませんけど。

奥さん いえ、そうじゃないんですけど。お取り込み中ですか。

草脇 いや。大丈夫ですよ。ねえ。

哲 ああ。

奥さん あんた。

ラーメン屋 ああ。どうも、皆さん、こんにちは。ははは。

奥さん あんた！

ラーメン屋 わかってる、わかってるって。ははは。あの、おまえ……

奥さん つとにもう、だらしない。早く。

ラーメン屋 あ、ああ。ア、アーバンが……

アケミ あ、心配してきてくれたんですか。ドラゴン亭さんも同じ商店街の仲間ですもんね。

ラーメン屋 ええ、まあ……そうなんですが……

奥さん あんた！！

ラーメン屋 そうじゃないんです。あの、店を止めることになりました……

晶子 ええ？ドラゴン亭さんも。

アケミ 流行ってるじゃないですか。雑誌にも載ったりして。

奥さん あんた、ちゃんと言わないから。

ラーメン屋　だけど、おまえ……、こりや参ったな、ははは。

清　　どういふことですか。

奥さん　店、閉めるわけじゃなくて移るんです。

哲　　どこへ。

奥さん　アーバンに。

皆驚く。

ラーメン屋　ははは。

徳　　やっぱり、ほんとにアーバンはくるんじゃない。

ラーメン屋　まあ、私らにも声がかかるくらいですから。ははは。

奥さん　正式な契約はまだなんですけど。

哲　　だけど、ラーメン屋が移ってどうすんだよ。

奥さん　あのイトインとかいうらしいんです。

キョーコ　ああ、知ってます。奥さんたちが子どもを連れて一日中いたりするんですよね。買い物して、お昼を食べたりお茶を飲んだり。

哲　　ちえ、そんなんじや、ますますこつちは客が引くわけだ。

ラーメン屋　あのー、それでー、そこに店を出さないかと……

哲　　おい、じゃ、この商店街捨てんのか。

清　　哲さん。

奥さん　仕方ないじゃないですか！

晶子　奥さん……

奥さん いい条件なんです。賃貸料がほとんどただなんです。雑誌に載ったうちのドラゴン麺をやって欲しいって。目玉にしたいって。皆さんと違って、私たち、あの店舗は持ち家じゃなくて借りてるじゃないですか。前から、もつといいところがあつたら移ろうねって、話してたんです。ね。

ラーメン屋 あ、ああ。ははは、そうなんです。

奥さん 別にこの商店街じゃなくてもいいんです。おいしいラーメン作れば。ほんとに、いい話なんです。

ラーメン屋 あの、それでも、なんというか、皆さんに黙っていくのは、やっぱり心苦しいって二人で話して……、な。

奥さん ええ。ここに来たとき皆さんにお世話になったこと、ほんとにありがたかったと思ってますから。

ラーメン屋 あ、ありがとうございました。

奥さん それじゃ。

二人行こうとする。

奈津唐 (寝ていたが突然) 待てえー。

夫婦驚いて立ち止まるが、奈津唐屋、大げさな寝言だった。

清 この人は放っておいて大丈夫です。

奥さん はい。では。

徳 なあ。

ラーメン屋 はい。

徳 がんばってな。

ラーメン屋 ……はい。う、うまいラーメン作ります。

## 二人行く。

雅美 やっぱりつぶれちゃうからここを出ていくの？

草脇 そうなんでちゅよー。

アケミ ゲンちゃん。

美佳子 あ。雅美ちゃんの話聞いて、私たちも人ごとじゃないって思ったんです。

沙也加 の家のこともあるし。

沙也加 さっきも言ったけどさ、私もしょっちゅう言われるもんね。学校で。

雅美 雅美もなにかする。

沙織 え。

美佳子 なにか、今いろいろと考えてるんでしょ。私たちも、自分の家の手伝いだけじゃなくて、何かできないかなって、協力して。

沙也加 なんかは、役に立つんじゃないかな。

清 みんな、ありがとう。その気持ち、ありがたくもらっておくよ。ほんとありがとう。

沙也加 あたしたちこの商店街で育ってき、ここ結構好きなんだよ。な。

雅美 うん。

昭雄 ここが、好き？

沙織　　ここが、好き、か。

草脇　　オレもこの場所が好きだ。

アケミ　ゲンちゃん。

清　　切り替え早い。

草脇　　子どもたちの勇気は、心の栄養剤だ。ね、アーバンが来る、お金や戦略じゃ太刀打できない。清さん、あんたそのショウテンガイズ、

キョーコ　あら、ショウで切って、テンガイズにしなきゃ。

草脇　　show—天 guys。それは、あんたの言うとおり、オレたちの誇りに思えるものになるのかい。

清　　はい。僕が考えているとおりなら。

草脇　　そうか。徳さん。

徳　　ん。もともと清さんに商店街会長を任せたのも、私ら年寄りじゃ思い浮かばん出来ないことをやってくれるんじゃないかと、そういうことじやったんだから。

哲　　そうだな。

草脇　　あんたも、助けてくれるんだろ。昭雄。

昭雄　　あ、ああ。

清　　わかりました。具体的に準備に入ります。昭雄、曲はお前が作ってくれ。

昭雄　　え。その話は、断ったろ。

清　　バンドの曲はおまえが全部作ってたじゃないか。いい曲多かったぞ。ここで

生まれたお前が作ることが肝心なんだ。

アケミ　お願いします。

皆も口々に頼む。

昭雄　やめてくれよ。いや・・・、そんなさ、甘いもんじゃないんだよ。素人がどうこうできるような・・・、

奈津唐　（また突然起きて）昭雄ー。おまえ、なんでバンドやめたー？！

昭雄　え。

奈津唐　なんでだー。お前のバンド、エンドレスウェイ、オレはライバルだと思っていたー。

昭雄　・・・

奈津唐　・・・

清　（奈津唐が）こいつ、目開けたまま寝てるわ。

奈津唐　よーし。

清　あ、起きた。

奈津唐　音楽を捨てたそんなあんたには任せられん、志は一度も曲げたことはありません、そう、この僕が、**show—天 guys** デビュー曲、見事作って見せましよう。このフォークギターと自らの青春に誓って。

沙織　何いってんの。

奈津唐　僕は本気だ。勝負だ。

沙織　あなたは、暗い四畳半フォークでしょ。ダメダメ。

奈津唐　なんだと。何がアイドルだ、音楽はフォークだ。暗いというなら、四畳半から青空の下に飛び出したニューフォークで勝負だ。

昭雄　清、オレ降りる。

奈津唐　勝負だ、昭雄―

みな、慌てて奈津唐の口を押さえる。

昭雄　素人がいい気になつてんじやねえよ。（皆に）あのな、ヘンな期待するなよ。オレのことじゃねえぞ。オーディションやって、ろくな奴が来るかよ。オレが教えたつてさ、大したことねえのは、結局大したことねえんだよ。

美佳子と沙也加、雅美が胸を張って昭雄に近づく。

昭雄　な、なんだよ。

美佳子が指を鳴らすと音楽がかかる。子どもたち見事に踊る。バシツと決まって。

沙也加　地蔵通りダンシングチーム。どう？

昭雄　（思わず）お見それしました。

皆拍手。

奈津唐　よし、今日はこれくらいで勘弁してやる。三日後三日後に勝負だ。昭雄―。  
青空フォーク！！

勝負、勝負とうるさい奈津唐に「こりやダメだ」と皆退場。昭雄の困惑した表情が浮かぶ。

## 六、北沢春子、昭雄と再会

前景から何日か経った昼下がりに。北沢春子が、青空の下、陽射しを浴びて地藏広場にいる。そこへ昭雄、頭を両手でかきながらやってくる。昭雄が考える時の癖である。

春子 ああ。

昭雄 (気づかないようで無言)

春子 昭雄さん。

昭雄 え。

春子 やっぱり。昭雄さんだ。すぐにわかりました。だって、その癖。(と頭をかく奴)

昭雄 え。

春子 昔、あたしが質問すると、いつもそうやって考えてた。宇宙の外にはなにがあるのとか、虹は下からみたらどう見えるとか、昼と夜の境目はいつとか……、だれ？

春子 北沢春子です。北沢豆腐店の北沢清の従姉妹の、北沢春子です。

昭雄 春子……、春子ちゃんか。



春子 はい。

昭雄 大きくなったなあ。いろんな意味で。（春子役が大きい場合、ですね）

春子 はい。小学校の時からですね。清さんのところに、よく遊びに行っていて。

昭雄 たしか隣町だったよな、家は。

春子 ええ。

昭雄 そうだ、どこか遠くへ転校したんじゃないかって。

春子 覚えていてくれたんですか。

昭雄 ああ、うん。

春子 また、帰ってきたんです。昭雄さんが、ここを出てからですけど。

昭雄 ……。今、何してるの。

春子 ダンスを教えています。

昭雄 え。

春子 隣町の小さなスタジオで、子どもたちに。昭雄さんみたいに向こうでばりば

りってわけには行かないですけど。今度、一緒にお仕事できるの楽しみにしています。

昭雄 え、どういうこと。

春子 わたしが、振り付けの担当なんです。あの、さっきは何を考えてたんですか。

もしかして、**show—天 guys**のデビュー曲のこと……

昭雄 違うよ！

春子 ごめんなさい。あの、清さんから聞いて……。楽しみなんです。昭雄さんの

曲で、ここから、誰かがデビューするなんて、素晴らしいじゃないですか。もう話し聞いてすぐにのっちゃった。わたし、ここが好きだから。

昭雄　ここが、好き……

春子　まるでここが自分の田舎みたいな感じがするの。

昭雄　どういふことだ。

春子　初めてここに来たとき、すぐくびつくりしたのね。うちは住宅街だったし、買い物もスーパーだった。お店がこんなに一杯並んで、そこに自分と同じくらいの子どももたくさんいて、遊んで、それからお父さんやお母さん、おじいちゃんやお婆ちゃんたちもたくさんいる。それで、いろんな匂いがしてくるの。

昭雄　匂い？

春子　「ここ、なんか変な匂いがする」っていったら、昭雄さんが、初めてあった私に「ばか。これはいい匂いなんだ。商店街のいい匂いだ」魚屋さんや肉屋さんや油や果物やそれから人間の匂い……それで、

「おい」と清がやってきた。

清　なんだ、ここにいたのか。

春子　清さん。

清　おう、来たか。その様子じゃ、もう昭雄と話したんだな。

昭雄　おい、清。

清　なあ、チラシこれでいいかな。（昭雄に）

春子 なに？（と手に取る）

清 オーディションのチラシ。

春子 へえ。

昭雄 その辺は、お前に任せるよ。

春子 （読んで）忘れていた落とし物がこんなところにあった・・・、夢、一緒に探しに行こう、か。

清 市の広報でも取り扱ってくれることになったし、あと地域の情報誌にものる。

春子 チラシ、うちのダンススタジオにも張っとく。

清 そうだよ、ダンススタジオなんてねらい目だよな。春子ちゃん、悪いけど、ほかにもいいところあったら、貼らしてもらって。

春子 うん。了解。

清 キョーコちゃんが、ホームページも作ってくれるって言うし・・・

春子 へえ、すごいね。頑張らなくちゃ、ね、昭雄さん。

昭雄 ……

清 それで、どうだ、曲の方。

昭雄 オレは、詞から先に曲を作るんだ。

清 だから、詞も書いてくれるんだろ。

昭雄 だから、すぐにやできないんだよ。

**昭雄去る。**

春子 少し感じが変わったかな、昭雄さん・・・

二人も去る。がらんとした広場。

## 七、猛、真もダンスを始めるきっかけのこと

前景から数日後の広場に、猛、真やってくる。手にチラシを持って  
いる。沙也加、雅美、追いかけるようにやってくる。

沙也加 な、やるだろ。

猛 しつけないあ。

真 オレたちがやるわけねえだろ。

猛 だよ、なんでそんなことやらなきやいけねえんだよ。

雅美 お兄ちゃん、やろうよ。

猛 黙れ。関係ねえよ。

沙也加 なんて関係ないのよ。あたしたち自身の問題じゃない。やっぱり格好悪い。  
真 とにかく面倒くせえの。

雅美 一緒にオーディション受けるだけでもいいから。

沙也加 ダメ。受けるだけなんて。やるからにはこれに合格して、私たちが、show—  
天 guys のメンバーとしてデビューしなきゃ。ね、マチャミ。

雅美 うん。あたしデビューする。だから、特訓しよう。踊りの練習。

猛 あほか。男がタイツはいて、アンドウトロワなんて出来るか。気持ちわるい。

なあ、真。

真 そうだよ。（とふざけて踊ってみせる）

沙也加 格好良く踊ったらもてるかもよ。

真・猛 え。

沙也加 女だったらさ、やつぱりそうじゃないかなあ。かつこよく踊る人が、好き。

雅美 でも、お兄ちゃんと真ちゃんには無理じゃないかなあ。

沙也加・雅美 そうかもねー（と猛と真を見る）

二人、乗りそうになるが、

猛 ひっかからねえよ。そういうのには。

沙也加、雅美 ちえ。

猛 アブねえ、あぶねえ、沙也加のくせに騙されるところだったよ。なあ、真。

真、固まっている。いつのまにか、美佳子が来ていたのだ。

美佳子 真君で、踊り嫌いなんだ。

真 い、いや。

美佳子 じゃ、好き？

真 好き。

猛 おい。

美佳子 じゃ、一緒に踊ろう。

真 お、オーケー。

猛　ちよつと待てよ。

沙也加　男の友情、どっちに転ぶのかな。

雅美　うん。

猛　おまえらな。

沙也加　美佳子さんは、どういう男の人が好きですか？

美佳子　一生懸命やる人、かな。

猛　なにが、一生懸命だよ。おまえらね、魂胆はわかってんだよ。なあ、真、行こうぜ。

真　おれ、一生懸命やるから。

猛　おい。

真　見てくれる？

美佳子　うん。

猛　情けねえ。

皆、一緒に去る。猛残される。

猛　馬鹿じゃねえの。ちつ。

沙也加戻ってきて。

猛　なんだよ。

沙也加ウインクする。(じゃなければ、役者さん得意のものでよし)

猛 だから、なに。

沙也加 行こう。

沙也加 行く。

猛 おい。・・・なんか、ちよつといいかも。おーい、ちよつと待てよ。仕方ねえなあ。

猛、去る。

八、奈津唐、「すごいゼメルヘン商店街」を披露すること

今は、「showー天 guysデビュー準備委員会室」になった商店街の倉庫兼詰め所で、沙織と春子がチラシを折っている。

春子 よし、こっちは終わり。

沙織 あれ、早いな。

春子 こういふのは得意なんだ。オーディションももうすぐだし。頑張らなきゃ。

沙織 じゃ、これ。(と自分のところから大量のチラシを渡し、驚く春子に) 清さんが、あちこち頼んで、DMに入れてもらってるみたい。

奈津唐が飛び込んだ。

奈津唐 さあ、約束の三日が経ちました。昭雄さん、あなたの音楽人生と僕の音楽人生の勝負の時がやって参りました。昭雄さん、昭雄さん、昭雄さん！！

春子 昭雄さんは、今日はいませんよ。

奈津唐 なにー、逃げたか。あなたどなたです？

春子 はい・・・

沙織 春子さんて、清さんの従姉妹で、ダンスの先生。振り付け担当。

春子 よろしくお願いします。

奈津唐 こちらこそ。ダンスイズビューチフオ、あなたもビューチフオ？

春子 え。

沙織 ああ、馬鹿だから。

奈津唐 聞いていただきましょう、あなたのダンスマインドに届けちゃいましょう、春子さん。三日三晩で書き上げた傑作です。明るいフォーク、四畳半の世界から青空の下へ飛び出した、ニューフォーク、題して「すごいぜメルヘン商店街」

奈津唐、ギターを弾きながら歌う。

すごいぜ いけるぜ ぼ、ぼ、ぼ、ぼくらの商店街

右が魚屋左に八百屋 その次美容室にラーメン屋

夢がいっぱい ふくらんで

ふくらみきって はじけておちた



すごいぜ いけるぜ 地蔵通り、メルヘン商店街  
風が吹いてた 青空

すごいぜ いけるぜ ぼ、ぼ、ぼ、ぼくらの商店街  
右がコロツケ左に時計 その次はおもちゃ屋本屋  
夢がいっぱい ふくらんで ふくらみきって はじけておちた  
すごいぜ いけるぜ 地蔵通り、メルヘン商店街  
風が吹いてた 青空

奈津唐 どうですか。Show—天 guys デビュー曲、「すごいぜメルヘン商店街」。春子  
さん、どんな振り付けになるんでしょう、か。あれ？

春子、沙織、あまりのおかしさ？くだらなさ？に退場している。奈津唐「津唐いつの間にか一人になっている。奈津唐、「あれ」「どこにいったのかなあ」と二人を捜す中、一瞬、例のポーズで曲作りに苦労している昭雄が浮かぶ。

## 九、商店街キッズの特訓

激しいダンス音楽。子どもたちが踊っている。猛、真、美佳子、沙也加、雅美。真が間違えた。

猛 真、違うって。こうだよ、こう。

真 畜生。ええと、こうで、こうか。

猛 うんうん。

美佳子 二人とも違う。こうで、こう。

真・猛 こうで、こうか。

美佳子 そうそう。

沙也加 でもふたりともがんばるじゃない。ちよつと見直した。

雅美 うん。びつくり。

美佳子 才能あるかもしれないよ。

猛・真 そうかあ。

沙也加 それは言い過ぎ。

雅美 お兄ちゃん、いやがってたくせに。

猛 うるせえ。

美佳子 いよいよだね。オーディション。

真 おう。よっし、もう一回行こうぜ。

皆 おう。

再び音楽がかかる。踊り出す。手にチラシを持ちオーディション会場を目指す若者たちが重なって浮かぶ。敬子、みち、浩明、坂上、そしてさすらいの腹話術師・・・

腹話術師 ああ、疲れた。もうこの年になると歩くのもしんどい。

ゴロー 電車賃ぐらい稼げよ。

腹話術師　そんなこと言ったって、アベノミクスはボクらには関係ないし。

ゴロー　ああ、愚痴はいいよ、愚痴は。

腹話術師　しかし、ようやくあの歌声が聞こえる場所にたどりついたんだから……。

ゴロー　あ、そうだ、忘れてた。

腹話術師　なにを。

ゴロー　みなさんにお知らせ。

腹話術師　ではゴローちゃん。

ゴロー　ただいまより、15分間の休憩だよ。

## 休憩

## 一〇、オーディションと結果

オーディションの会場。最終選考前の最後の確認を各自が熱心に行っている。さすらいの腹話術師、相棒と登場して。

ゴローね、ね。the show—天 guys のデビュー曲ってさ、どんな曲になるのかな。腹話術師 どうだろうなあ。昭雄さんも悩んでいるみたいだし……。

ゴローそうか。

腹話術師 あ。そろそろオーディションが始まるみたいだよ。

ゴローでは第二幕のはじまり、はじまりー。

清、昭雄、春子、それから徳さん、ゲンちゃんが審査員でやってくる。

清 最終審査に残った皆さん、今日は、ありがとうございます。ほんとうに。最後は踊りの試験です。もう一度自己アピールをしてから課題に臨んでください。昭雄。

昭雄 別がない。

春子 それじゃ最初のグループから。

敬子 橘敬子29歳。これに賭けてみようかなと……、これに賭けてます。よろしくお願いします。

雅美 板東雅美です。（俳優さんが自分で自分の魅力を簡潔にアピールしてください）スターになりたいです。

坂上 坂上あきら25歳です。お袋に、晴れ姿みせたいっす。よろしくっす。

美佳子 竹内美佳子です。踊りが好きです。一生懸命踊ります。

真 北沢真です。まだ、下手くそですが、よろしくお願いします。一生懸命踊ります。

顔を見合わせる、美佳子、真。そこに女装した奈津唐が乱入。

奈津唐 なつから子です。12歳です。曲は、「すごいぜメルヘン商店街」 頑張ります。♪すごいぜ いけるぜ！

会場整理担当のアケミらが奈津唐を抑えて連れ出す。

奈津唐 やめてよ、やめてよ。あたし、スターになるの。お願い、チャンスをちょうだい・・・

などと連れて行かれる。

春子 さあ、行くわよ。

晶子、出てきて応援する。祈る。沙織、哲、出てきて派手に応援する。邪魔なので、アケミらに連れて行かれる。第一グループの踊りが終わった。人が入れ替わる。

沙也加 林沙也加です。林文具店復活目指して、ガンバ。

みち 主婦です。岡島みち。わたしは・・・アラフィフです。子どもが二人います。少し手がかからなくなりました。だから、まだ自分の中に残っているもの、

それがなんなのか、確かめたいと思ってここにきました。よろしくお願いします。

猛

板東猛。結構燃えてます。おもしれえ。やります。

浩明

ん、おれか。あんまり口でアピールするのは得意じゃねえ。西田浩明。今回は、腕試しできた。いずれ、中央デビュー、ビッグになる。よろしく。

踊りはじまる。やがて踊りが終わった。

清

ご苦勞様でした。一時間後に集まってください。合格者を発表します。その前に、一つだけ。もう一回だけ皆さんにお聞きたい。本気ですか。これは豆腐屋の親父の馬鹿げた妄想かもしれません。デビューなんて、夢かもしれません。とりあえずは金銭的な保証も何もありません。僕が言えるのは、僕は、精一杯誇りを持ってやるつもりだということです。つきあっていただけですか、皆さん。

拍手。暗転。拍手が残る。拍手が消えたと思ったら、明転。  
皆が真を見ている。オーディションを受けたメンバー、それから審査員、商店街の哲、沙織、アケミ、キョーコもいる。

昭雄

以上だ。はっきりいってレベルが低くて失望している。今のままじゃ、どんな素人プロデューズでだって、デビューなんて恥ずかしくて口に出来ない。心してやってくれ。それでは、合格者は残ってくれ。今後のスケジュールの説明をする。

哲

清ちゃん……。

清 うん、昭雄ちゃんに任せてるから・・・、仕方がないよ。

昭雄 どうした。ああ、不合格者は一人か。

真 駆け出す。彼は一人、不合格だったのだ。

猛 真！

美佳子 猛。（と抑える）

と、猛立ち止まるが、

沙也加 行った方がいい。

美佳子 沙也加。

沙也加 男同士だもん。

猛、行く。

昭雄 はっきりいって、合格したものとあいつに差はない。全体のバランスを考え

ただけのことだ。それから、春子。おまえもメンバーにはいつてくれ。

春子・・・はい。

清 それでは、地藏広場で行われる秋祭り特設ステージでのデビューライブ、その日のシングルCD発売。デビューライブはテレビ局での生放送も決定します。

皆、どよめく。

清

しかし、テレビ局は地元のU局、ノーギヤラ。CDは、自主制作版です。私も売ります。ですが、皆さんも売ってください。皆さんは、これから、古谷昭雄、北沢春子の二人にデビューまで鍛えてもらいます。解散。

それぞれ希望と期待と不安のなか解散。  
会場の外。走ってきた真、追いかけてきた猛が登場。

猛

真、真。

真

くんなよ。

猛

な、もう一回練習してさ、メンバー入れてもらおうよ。

真

バカじゃねえの。仕方ねえよ。落ちたんだから。

猛

ほんと、そう思ってたのか。一生懸命やろうぜ。

真

一生懸命やったって、しょうがねえだろが！

真行く、猛追う。

昭雄と春子浮かぶ。

春子

どうしてあたしもメンバーに？

昭雄

いやならやめればいいだろう。

春子

正直言うと、だれか言ってくれないかなって思ってた。あいつも入れようって。

昭雄

あんなに、目キラキラさせてりやみえみえだよ。



春子　ありがとうございます。

昭雄黙って行こうとする。

春子　昭雄さん。昭雄さんのバンド、エンドレスウェイのテープ貸してくれないか

な。もう、ずっと聞いてたんだけど、聞きすぎて伸びちやった。だから・・・

昭雄　ねえ。

春子　え。

昭雄　そんなもん、どこにもねえよ。

昭雄行く。一人残る春子。

十一、レッスンはじまる、それぞれの想い

show-1天 guys の「大人グループ」に春子。踊りのレッスン。踊り  
終わった。

春子　じゃあ、休憩。でも、ほんのちよつとだけー。

浩明　きつついなあ。

坂上　がんばろうぜ。

浩明　無駄に元気だな。

敬子 もう足ばんぱん。

みち 若いんだから。

敬子 岡島さんこそ。

みち はは……、笑う力がない。はー。

皆、疲れているが充実しているようだ。

敬子 今日は、若いグループは？

浩明 オレもわけえんだよ。

敬子 はいはいすいません。

春子 うん。学校終わってから。敬子さんは、会社大丈夫なの。

敬子 こういう時のために有給ためてあるから。

春子 そうか。社会人には、そういうのあるんだものね。

敬子 自分の時間を会社に捧げてるんだから、権利は権利できちんと活用しないとね。

坂上 デビューしたらどうすんですか。会社なんて言ってられなくなるかもしれないっすよ。

浩明 そうなりやいいけどな。

敬子 そしたら、その時考える。やっぱりやりたいことやらなきゃ。

みち ふーん。

敬子 え。

みち いや、人生をそんな風に考えられるっていいなって思っ

坂上 お、さすが主婦。人生の重みが違いますね。

みち うるさいよ。

浩明 主婦から、デビューなんてよ、結構話題になったりして。

敬子 あ、ママドルね。

みち そんな格好いいもんじゃないけど。

春子 ……あの、岡島さんは、どうしてですか。

みち え。

春子 私、田舎帰ってきて、子ども達にダンス教えてたんだけど、……ようやく今度たまったものはき出せるかもしれない、って。岡島さんも、もしかするとそういうことなのかなって。

浩明 なんだ、それ。

みち うん。そうだね。でもね、主婦もいいんだよ。旦那の面倒みて、食事つくって、ハンバーグうまくできれば嬉しいし、子どもって可愛くて、大きくなつて生意気になってきたら、それはそれで嬉しいし。充実感だってないことなかったしね。

春子 じゃ、どうして？

浩明 だから、なんだよ、それ。

敬子 おこちゃまは黙る。

浩明 なんだと。

みち なんてだろうな、ほんと。結婚するまで、子どもの時からこういうの懂れて……。

不思議なんだよな、このオーディションのチラシ見て、一回は、捨てたの。それで、ああ、捨てなきゃ良かったなあって思ったたら、家の台所のテーブルの上に乗ってた。

浩明 捨て忘れたんだろ。

敬子 ロマンがないわね。

みち うん、そうかもしれない、わざと捨て忘れたのかもしれない。でも、もう一度あのチラシ見たら、それこそたまってたもの全部でてきちやった。その後は、ここまで一直線。

敬子 旦那さんは。

みち あれこそ鳩が豆鉄砲くらった顔っていうのかな。未だに呆然としてるみたいへえ。

敬子 でも、家のこととか何にも出来ない人だから。ほんとこれでいいのか、主婦岡島みち。

浩明 だいたいよ、そんなふう甘いもんじゃねえんだよ。こういう世界は。そんなによくしってるのかよ。

坂上 しろねえよ。だけど、どんなスーパースターだって下積みの時期はある。オレは、自分を信じてるんだ。岡島さん、あんた、子どもの頃からの夢だつて言うんなら、そいつを一回諦めたんだろ。一回逃げた奴が、また夢おっかけられるほど、この世界は甘くねえよ。そっちの誰かさんみたいに、仕事と二股賭けてるよりマシだけどな。

坂上 ……腕試し、つていつてたよな。

浩明 ああ。

坂上 おまえも、結局この仕事、マイナーだとか何とかバカにしてるんじゃないのか。

浩明 なんだと。オレはな、フリーターやってどんなチャンスでも逃さない、ステップの一つにしようって、網はってんだ。

坂上 それが、そのステップとか言うのがバカにしてるって、いつてんだ。  
春子 やめて。

敬子 いいじゃない、動機なんて、きっかけなんて。人は人、それぞれよ。私なんて、男と別れて、それがきっかけなんだから。バカみたいでしょ。しかも今でもその人会社の上司。バカみたいでしょ。どう？

### 男、二人黙る。

敬子 さあ、稽古稽古。

春子 もうちょつと続けてみたら。

敬子 ……岡島さんの旦那さんは正社員？

みち え？ うん、そうだけど……

敬子 そうだよね。

みち なに？

敬子 いやぜんぜん悪くないんだけど、そういう感じ。わたしね、七年間ひたすらひたすらエクセルに数字打ち込んだの。派遣社員なんてそんなものだけど。

でも、どうせそれしかできないんだから、って言われちゃったの、正社員のその人に。違うって。派遣は言われたことを文句も言わずに意見も言わずにやり続けて時給もらって、毎日毎日やめたいって思わない日はなくて、それでも三ヶ月ずつしか雇ってもらえなくて、不安で、首になった仲のいい子なんてそれから派遣の仕事でさえ何処にも受からずに田舎へ帰っちゃったり、もうどうすんのかって思いながら、それでも、その人と会社で目があったり、短いメールが来たり、それでどうにかこうにかやってたのね。それはないだろうって。すごく悔しかった。

ぶつとばしてやりやあいんだよ。

浩明  
敬子  
浩明  
敬子

ね。でも、目覚めちゃった。

浩明  
敬子

なんだよ、それ。

敬子  
浩明  
敬子

どうせ、不安で、我慢して、これからお金持ちになろうっていうんじゃないなら、これまでと全然違うふうに毎日を過ごせるんじゃないかって。

春子  
浩明  
敬子

それか……。

浩明  
敬子

でもよ、会社はやめてないんだろ。

敬子  
坂上  
敬子

それが大人の悩ましいところだ。あー。だって自信なんてないもの、自分に。

まったく。あ、何でこんなこと話しちゃったんだろ。すいません。

坂上  
敬子  
浩明

いや。オレは、おふくろのことがあって、

敬子  
浩明

あ、言ってた。

浩明  
敬子

お、マザコンか。

坂上 ああ、そうかもしれない。

浩明 なに？

坂上 母一人子一人で、ずっとだから。

浩明 ふん・・・。

坂上 子どもの頃、うん、お袋が働いていて保育園に預けられてて、そこでクリスマス会つてのがあった。なんか似合わないけど、教会がやっている保育園で、今考えれば安かったんだな、お金が。そこで、イエスキリスト生誕劇をやったんだ。

浩明 アーメンソーメン冷やソーメンってか。

敬子 ちやかさないの。しかもつまんない。

みち 何の役だったの。

坂上 羊飼いの3。

浩明 似合いだなあ。

坂上 台詞は一言。「あ、流れ星だ。まぶしい」。キリストが生まれるときに流れ星が落ちる。それをたまたま見ていた羊飼いの台詞。まぶしい！ ていいたら他の羊飼いのまぶしと目がくらんでふせるんだよ。立って！

みな、反射的にあるいは渋々と立つ。

坂上 「あ、流れ星だ、まぶしい！」

みな「うわっ」と座る。

浩明　なんだよ、これ。

坂上　「まぶしい！」

また、みんな「うわっ」と座る。

坂上　そうそう、これが楽しくて。みんないつせいにそうなるのが。

浩明　暗い。おまえ、絶対いじめられてたな。

坂上　それで、おふくろがほめてくれた。仕事が忙しいから来ていないと思ったお袋が来ていて、ほめてくれた。上手だったって。今まで一度も褒めてくれたことなんかなかったのに。もう一回褒めてもらおうと思って。

浩明　おまえ、保育園からあと一回もほめられたことねえのかよ。

坂上　ありません。

浩明　暗い、暗い、絶対暗い。

坂上　おふくろはね、テレビが好きなんだ。いつもテレビを見てる。笑うわけでも泣くわけでもないんだけど、ずっと見てる。今じゃ、仕事もやめたからほんとに一日テレビ。すっかり年をとった。あ、ぼく、結構年がいったからの子どもなんです。どう思います？

浩明　え？

坂上　僕はおふくろになにをやってやればいいですか？

浩明　ああ。じゃ、バイトして新しいテレビでもかってやれよ。おっきいやつ。



坂上 違います。

浩明 え。おまえなんか目の色違ってるよ。なんか危ないなこいつ。キャラ変わってんじゃない。

坂上 僕がテレビに出ることが、お袋を喜ばす一番の方法じゃないでしょうか。違いますか？ テレビに出たら、またほめてくれるかもしれないし。（にやつと笑う）

坂上、本当にキャラクター変わってます。

浩明 やめろ！！

坂上 あれ、どうしたんだろう。すいません、なんか変でした？

と、戻っている。

浩明 変だったよ。

坂上 いやあ、時々なるんですよ。  
浩明 なるなよ。

坂上 とにかく、オレがテレビに出たら、喜んでくれるかもしれない。おれ、オーディションに受かったことも、まだ、おふくろに言ってないんですよ。こういうのって、急にいった方がきつとびっくりして、喜ぶんじゃないかなって。オレも半端な人生送ってきたから。すげえちっちゃいことかもしれないけど。あんた何感動してんのよ。

敬子  
浩明 （泣きながら）感動してねえよ。

敬子　じゃあ泣くなよ。

浩明　（やはり泣きながら）おう、坂上、だからなんだってんだよ。

坂上　だから、やるつきやねえってことじゃねえか。

浩明　よっしやあ、おまえらわかったか。

春子　さあ、休憩終了。

みち　よし。デビュー曲、もう上がってくるんだよね。

春子　うん・・・

敬子　すっごい楽しみ。

坂上　あの今日は、昭雄さんは？

春子　うん・・・。今日はちよつと。東京のほうへ一度帰ったみたい。忙しいらしいから。どうかしたの。

坂上　いや、何でもないんですけど。昭雄さん、QPガールズの面倒みてるって。

浩明　へえ。

春子　うん。昭雄さんそうだった。どうしたの？

坂上　そうですね、なんでもないっす。やりましょう。練習。

春子　うん。

みな、返事をして、それぞれの思いで立ち上がる。再び練習。  
真がのぞいた。踊りの振りをまねしてみる。熱が入って来た瞬間、  
後からやって来た美佳子に気づき、逃げた。

## 十二、デビュー曲完成？

昭雄が逃げるようにやってきて、清が楽譜とCDを手にとって追いかけてきた。

清 昭雄ちゃん。オレ、オレ素人だよ。素人だけと言わせてもらおう。これ、なんなんだよ。

昭雄 ……

清 これがほんとに、show—天 guys のデビュー曲なのか。

昭雄 ……

清 なあ。

昭雄 そうだよ。それがデビュー曲だ。

清 冗談だろ。

昭雄 いやならやめれば……

清 昭雄ちゃん。これなら奈津唐の曲のがずつといいよ。オレが昭雄ちゃんに頼みたかったのは、こんなじゃない。いや、曲の善し悪しじゃないんだ。そんなのオレ素人だし、でも、これは、ヒットした曲の歌詞とメロディー寄せ集めただけじゃないか。な、もう一回……

昭雄 勝手にしろ。オレは降りる。

清 違うよ、オレはお前の素直な思いを、一生懸命練習しているあいっすらみた思

昭雄  
いをそのまま曲にして欲しかったんだ。

昭雄  
バカ野郎、素人が。いいか、歌ってのは売れなきゃなんの意味もねえんだ。売れて初めて歌なんだ。客が金出すものつくるのがオレたちの仕事なんだよ。素直な心とか、一生懸命とか、一番遠いんだよ。

春子がいつの間にか来ていた。

清  
昭雄ちゃん……。バンドやってたときと、バンドのライブのテープ聴きながら、一晩中飲んで話してたことと、まるつきり正反対のこと言うんだな。

昭雄  
……。

清  
昭雄ちゃん。オレ知ってた。

昭雄  
え。

清  
東京帰ってどうだった。バイト大丈夫だったか。こんなに休んで首になりそうだったんだろ。

昭雄  
……。

清  
オレ、実は、事務所へ電話したんだ。ほら、前に名刺もらったじゃないか。バンドやってるとき、預かりになったからって。最近じゃないよ。このプロジェクト思いついたときすぎさ。

春子  
清さん……。

清  
春ちゃんも聞いてくれ。昭雄ちゃんに頼もうと思った。でも、オレ、一生懸命やりたかったから調べたよ。今、古谷昭雄は何してるかって。で、教えてくれたんだ。親切な事務の人が電話でさ、ああ、あの人、今、この世界とは

何の関係もない・・・

昭雄 やめろ。(春子を見て) なんだ、そっちも別に驚いてないんだな。

春子 坂上くんが……、メンバーの坂上君の知り合いがQPガールズの事務所のマネージャーだって。それで、昭雄さんのこと聞いたことないって。そういつたから。

昭雄 なんだよ……、みんな知ってんじゃないか。

昭雄、行こうとする。

春子 だめだよ。

昭雄 え。

春子 行っちゃだめ。

清 オレ、お前でいいと思ったんだ。知ってたよ、オレ最初から。それでも、そう思ってた。

春子 だって、稽古の時だって、おかしい事一つもいってなかったよ。すごくちゃんとしてた。

清 だから、

昭雄 逃げたんだよ。

清・春子 ……

昭雄 いわれたんだ。売れてから好きな曲かけばいいって。担当のプロデューサーが。もう固定ファンがつき始めていて、でも、売りたいんだったらそんな曲書いててもダメだって。そういうのは売れてから、好きなだけやりやいいっ

春子 どうして・・・

昭雄 ここを出ていく時、おふくろに言った。駄菓子、五円とか十円でよ。

清 なつかしいな。

昭雄 嘘つけ。おまえだって、テレビでやってたお菓子食べたいって、隣のスーパーまで一緒にいったじゃねえか。売ってなかったからな、うちにはそんな

もの。毎日毎日、五円玉と十円玉、こう積み上げて数えてさ、たまになかったよ。オレは言ったよ。「オレは、絶対、絶対、そんなふうにならねえ。好きなことやって生きていく」

あき そして、わしはこう言った。

昭雄 おふくろ。

清 徳さん、ゲンさん・・・

昭雄の母、あきが杖をつきやってきていた。徳さんとゲンさんが寄り添うように。

あき

「バンドかなんか知らんが、やりたきややりやええ。だが、わたしが好きで駄菓子屋やっとなることがわからんようじゃ、人様に音楽を聞かせることなんてできん。どこへでも行け。勝手にいけ」・・・。おまえは、昔から外面ばかり良くてな、大きいことばかりいうやつじゃった。ふん、久しぶりに帰ってきたかと思えば、ろくに顔も見せず口も聞かず、ゲンちゃん徳さんに話を聞いてきて見りや、やっぱりこのざまか。この馬鹿、馬鹿・・・。

と杖で打つ。

あき 五円、十円で生きてきたんじやろ……なんでわからんのじゃ。なにが音楽じや。

皆止める。

あき わたしが、なんでおこつとるのかわかるか。

昭雄 ……

あき お前が出ていく時、わたしや、店も終わらせる潮時と思った。ほっともした。小銭を握りしめて走ってくる子ども達の顔が見られなくなるのは、たまらなかったが、それでも、それでいいと思っておった。昔は、ベロを真っ赤や緑にしてあめ玉嬉しそうにしゃぶとった一人息子が、自分がそうしたいと思う人生送れるんなら、それでええ。わたしが五円、十円毎日毎日数えとった甲斐がある、そう思った。それが……。

昭雄、行こうとする。

あき 昭雄、行くな。

昭雄 おふくろ……

あき いや、がんばれとはいまいよ。だけどな、もうちよつとだけ、ここにおつたらどうじゃ。おまえはまだ若い。これから、どこへでも、また行ける。だから頼みごとじゃ。わたしらはもうここ以外にどこにも行きようがないんじや。徳さんやゲンちゃんもそうかもしれん。ここで死んでいくんじや。

清 あきさん……。

あき わたしのためにはいわん。力を貸して……

昭雄 オレには、その力がないんだ。人が金出して聞きたくなるような曲がかけねえんだ。

沈黙。

清 晶子と、女房と宮城に行っただんです。

皆 え。

清 漁師さん達が集まる商店街が流されちゃって……。新婚旅行の場所だったから、なんだかいてもたつてもいられなくなつて……。でも、みんなすぐくて、仮設なんだけど、どんどんお店が建てられていって、逆にこっちの商店街の話聞いてもらつて励まされたりして……。みんな、いい顔してお店やってて、集まつて……。だから、ここでもなにかできないかなつて……

あき そうじゃったか。

清 それで、最近思うんだ。お客さんが喜んでくれる豆腐作ろう作ろうって、ずっと思つてたんだけど、違うんじゃないかなつて。

草脇 清さん、どういうことかな。

清 もちろんお客さんが喜んでくれなきゃ仕方ないけど、まず自分が納得しなきゃしょうがないんじゃないかって。でも、本当に自分が納得するって、すごく大変なことだなつて。ようするに自分で本当に旨いと思う豆腐をまずはつくらなきゃって。せつかく豆腐屋やってるんだから。



徳 わしもわしのコロツケが一番好きじや。

清 徳さん。

春子 わたしは昭雄さんの曲好きだったな。

清 言ってたんだ。

昭雄 え。

清 電話でお前のこと教えてくれた、事務所の人が言ってたんだ。エンドレスウエイのファンだったって。あいつはいい曲を書いてたって。

昭雄 嘘だ。

清 嘘じゃない。その人は、奴には運がなかった。運がなかっただけなのさ。おれはあいつの大ファンだったって。そう言ってた。

昭雄 へっ！

清 昭雄ちゃん、オレが電話して、この話もちかけた時、すごく嬉しそうだったじゃないか。

あき 昭雄。

昭雄 たとえ、そうだとしたって、どうせ・・・

春子 昭雄さん、覚えてる？ ほら、この前帰ってきて初めてあった時、虹の話したの。

清 虹・・・

昭雄 虹の話・・・

春子 うん。私が、子どもの頃、虹の向こうに何があるって、聞いた時のこと。歩

いていこうつて。え？　　つていたら歩いていけばいいって、虹の向こうまで。清、春子、行くぞ、虹の向こうへ。何の迷いも、何のためらいもなく昭雄さん歩き出した。独りで先頭に立ってどんどんどんどん。

清　ああ、あつたな、そういうこと。

春子　ね。

昭雄　それで、どうした。

春子　歩いてたわ。疲れたっていったら、まだ向こうじゃない、虹の向こうには着いてない、歩こうつて。

昭雄　それで、どうした。

春子　え。

昭雄　それで、虹の向こうには何があつた？

春子　それは・・・

昭雄　ほら、歩いていったって、結局、何もない。なにもなかったんだ。

春子　違う。

昭雄　なに。

春子　歩いて、歩いて、歩いて……それで……

昭雄　なにがあつたんだよ。

春子　……

昭雄　いや、待て。

春子　え。

「walkin」のメロディが聞こえてくる。春子、あき、清が昭雄を見て「おー」と叫び声をあげる。昭雄はと見れば、例の考える時の頭をかく癖を激しく。直立不動真剣なまなざしである。

あき あ、あれは・・・

春子 昭雄さん、ようやく本気で考え始めたのね。

徳 ど、どうということじゃ。

春子 あれはね、昭雄さんが何かを考える時のポーズなの。

清 そして、あの直立不動になった時、その感性和頭脳はフル回転する。あいつが中学の時、旺文社模試で全国、

徳 全国？

清 全国128位になった時も、数学の試験中あのポーズが出た。

あき まだ小学校に入る前じゃ。あのポーズで次々と無くしものの在処を言い当てたものじゃ。昭雄！

草脇 なんだかわからないけど、すごいにやあ。

春子 昭雄さん、曲のインスピレーションが来てるのよ。

清 ほんとか、昭雄。

昭雄 (うなづき) おー。

春子 来た。

昭雄 来てます来てます・・・

みんな口々にがんばれ、来たか、どうした、等と叫ぶが、またしほむ昭雄。皆の応援でまたふくらむ。「来た来た来た」盛り上がるみんな、しほむ、がつくりする。この繰り返しの中、「walkin'」のメロディが次第に大きく。

### 十三、デビュー曲「walkin'」完成！！

「walkin'」がばたんと落ちると真が独りいる。独りで無言でステップを踏む。猛やってくる。

猛 違うぜ。それ。

真 真行こうとする。

猛 逃げんなよ。

真 なに。

猛 ステップ違うんだよ。それ変わってさ。こうだよ。

猛 ステップを踏む。真、無言でやってみる。

猛 違うって。こう。

真、やってみる。

猛 ああつ。こうだって。

真、やってみる。

猛 一緒に行くぜ。1, 2, 1, 2, 3,

二人のステップが見事に合う。

猛 やりやできるじゃねえか。

真 うるせえな。これ、遠くから見るとわかりにくいんだ。

猛 うん。でも、よく覚えてるよな。すげえよ。

真 ……行くわ。

美佳子と沙也加来る。真、黙っていこうとするが、

美佳子 楽しい？

真 え？

美佳子 一人で、踊って楽しい？

沙也加 美佳子さん……

真 一人で踊ってても、うん、楽しいよ。踊るのもしれえから。

美佳子 じゃあさ、わたしたち良く自主練習してるし、みんなで踊ったらもつと面白  
いんじゃないかな。

真 ……

美佳子 私は、そうだな。

沙也加 なるほどね。

美佳子 美佳子、一生懸命やる人と、それから楽しくやる人が好きだな。

真・・・

猛 おい、おもしれえことつてき、案外、その辺にころがつてんじやねえのか。  
そう思つてんだろ、ほんとのところはよ。

真・・・わかつたよ。

猛 ん、なに？

真 わかつたつてんだよ。

猛 遅すぎんだよ。

真 おー。よっしゃ。

美佳子 あたしより、猛か。

沙也加 結局男の友情ね。

四人笑い。そこに雅美やつてくる。

雅美 ねえ、聞いて。

沙也加 どうしたの。

雅美 せーの。

雅美歌う。

let's walkin`

let's walkin`

let's walkin`

仕方ねえ なんてことないよね〜

猛 なんだよ。それ。

美佳子 もしかして。

雅美 うん、show—天 guys デビュー曲「walkin`」だって。

83

うだ。メンバーだよ。

沙織 え、ええ、ええー

哲 な、なんだよ、どうしたってんだよ……

清、晶子、春子リズムに乗って歩きながら、

晶子 なんだかうきうきするような曲だね。

春子 思い出す。

清 歩け歩け。

続いて、

キョーコ ねえ、あたしここが好き。

アケミ いいわよねえ。あたしもメンバーに入りたくなっちゃった。

奈津唐 (出てきて) オレも。

アケミ・キョーコ笑い。

奈津唐 なにその笑い？ 何？ 「walkin'」 「walkin'」

みな「show-天 guysデビュー準備委員会」に集まった。楽譜とCDが配られる。その様子を見て、昭雄と清、がっちり握手。皆、明日のために散って行く。



## 十五、怪しい新聞記者あらわる

曲が完成してから一週間ほど経って。男が、稽古場を伺うようにしてうろうろとしている。清がそれを見つけて声を掛ける。

清 ああ……

記者 ああ！

清 どちら様ですか。

記者 びっくりした。

清 はあ？

記者 ああ、商店街の方ですか。

清 ええ。

記者 ああ、商店街の方ですか。（と名刺）

清 記者さん。

記者 タウン誌ですが。こちらで、例の、ええ、ショウテンガイズですか。練習が。

清 the show—天 guys

記者 へ？

清 切って、切ってください。ショウで。切って、テンガイズ。the show—…

…天 guys

記者 ああ、なるほど。しかし、新聞記事じゃ切れませんからね。

清 ……で？

記者 ええ、面白い試みだなあとはいまして、取材を。

清 え、そうですか。ありがとうございます。実は私、商店街会長でして。

記者 ああ、それはそれは。

清 それじゃ、とりあえずこちらへ。（と行く）

記者 はい。あの。

清 はい？

記者 商店街の皆さんの反応はどうですか。

清 といいますと。

記者 このプロジェクトに関して。

清 正直いいまして未だに関心を示さない方々もたくさんいます。

記者 地元の市民の反応は。

清 同様に。まだ宣伝不足ですし、これからでしょう。

記者 （にやりと）そうですか。

清 あの、その辺りも含めまして話を聞いて下さい。曲も完成しまして、もうデビューまで最後の仕上げに入ってます。今ちよつと休憩で食事に。さ、さ、さ。

記者 わかりました。

二人歩きながら、清「そもそもこのプロジェクトは、ただ単に客寄せじゃないんです・・・」と去る。

## 十六、練習すすむ ラーメン屋再び

The show—天 guysのメンバーが集まってくる。稽古が開始されるのだ。まずは思い思いにストレッチ、振りの確認などなど。これをバックに、会話が行われる。  
アケミ、キョーコ現れる。デジタルカメラを回す。

キョーコ いったいとつといてね。

アケミ うまくとれてるかねえ。

キョーコ 誰でもとれるから大丈夫。いよいよホームページも立ち上げたから、そこにはつちりのせるの。「the show—天 guys 稽古場日誌、デビューへの道」お母さんも書込んでね。

アケミ ああ。でも、わたしはそういうの苦手で。

キョーコ 何してるの？

みれば、アケミは、いろいろな色の布を持ってメンバーを見ている。

アケミ うん、どの子にどの色が似合うかなあって。

キョーコ どういうこと？

アケミ 衣裳考えてるの。衣裳係だから、なんてったって。もちろん、あんたも一緒に考えて。

キョーコ きれいなブーケの組み合わせ考えるみたいで楽しいかも。

アケミ そうだね。楽しいね。

キョーコ うん。

二人消える。徳、ゲンさん現れる。

草脇 あいつ、大丈夫かな。ああ、あの顔色ならもう大丈夫だろう。

徳 なんだ？

草脇 え、ああ、ほら坂上くん、昨日腹が痛くて下痢してるって言ってたから。もう大丈夫だな。

徳 そんなことわかるのか。

草脇 毎日見てりや、顔色ぐらい分かりますよ。

徳 へ、毎日か。相変わらず、商売は暇そうだな。

草脇 徳さんこそ。

徳 お。猛の今日のターンは切れとるな。

草脇 へ。

二人消える。春子、昭雄やってくる。showー天 guys、メンバーが口々に挨拶する。

昭雄 昨日のどこまで、一度やってみてくれ。

春子 リズム、アームス、気を付けて。

皆 はい。

昨日練習したところを歌い踊る。

昭雄 よし、そこまでは歌と踊りはだいたい入ったようだな。

皆 はい。

猛 苦勞したぜ。

浩明 ま、頑張ったかな。

皆のなかで笑い。

昭雄 おまえら勘違いするなよ。歌覚えて踊り覚えて、そんなのはあたり前だ。そ

こになにをのつけていけるかだ。すべてにおける基礎体力、歌なら呼吸、発声、アーチクレーション、踊りなら、表現の手段としての自分の身体への認識、客への意識、柔軟性、リズム感、すべてが足りないんだ。おまえらの百倍才能ある奴らが世の中にはうろろしている。お前らと違ってチャンスさえない連中もたくさんいるんだ。そいつらが、お前らの百倍努力してる。今のままじゃ、運がいいだけ、そいつらと差は開く一方だ、いいか。ちょっと待っててくれ。春子。

春子を呼ぶ昭雄。皆は、畜生といって、筋トレをはじめの奴。踊りの確認をする奴、などさまさま、だが、それぞれやる気に溢れている。

昭雄 あそここのところは、後ろ向かせないでくれ。

春子 ここ？

昭雄 あれじゃ、歌詞が死んじゃう。

春子 でも、その後のこと考えたら、一度向いてたほうがインパクトあるんじゃない。  
昭雄 い。

昭雄 インパクトじゃない。あそこはみんなの顔が見たいんだ。

春子 …… わかった。みんな集合。振りを変えます。えー、ここんところ、こうだったのを、こう。こうだったのを、こう。

と練習する。それを見ながら清と記者。

記者 へえ、結構本格的ですね。

清 そりやそうですよ。これでもプロ目指してますから。

記者 プロですか。なるほどね。

昭雄 プロ目指してるんじゃない。プロになるんだ。

春子 それじゃ、振り変わったところ気を付けて。

春子の合図で音楽かかる。皆が新しい振付けを踊り歌う。

春子 どう？

昭雄 オーケーだ。

春子 じゃ、みんなそういう感じで。

皆 はい。

春子 次のところなんだけど。

昭雄 うん。

ラーメン屋が奥さんとやってくる。

ラーメン屋 あの一。

清 ドラゴン亭さん。

ラーメン屋 ああ、どうも、こ、こんにちは。

清 どうしたんですか。

ラーメン屋 すいません。あの……

奥さん あの、顔出せた義理じゃないんですが……これ差し入れです。餃子とか。うちのものなんですけど。

徳さん、ゲンさん、沙織、哲もやってきた。

徳 ドラゴン亭さん、何か訳がありそうじゃな。

昭雄 みんな、ちよつと休んでろ。

奥さん 練習のお邪魔でしょうが、皆さんに聞いて頂きたいんです。あんた……

ラーメン屋 あの、実は……

奥さん アーバンの件、なくなっただです。

哲 なくなっただ？ なくなっただってのはどういうことだい。あんた、ドラゴン麵を売り物につて誘われたんだろうが。

ラーメン屋 はい……。

奥さん こっちから断ったんです。

草脇 そりやどうして。

哲 わかった。あまりのこっちの盛り上がり、自分たちのことだけ考えてたのが、いたたまれなくなっただろう。

ラーメン屋 違います。

哲 なに。

ラーメン屋　いえ。あの実は……練習もちよくちよく見させて頂きまして、それから、その若い方々もお店に来て頂いて、

浩明、坂上　ごちそうさまでした。

坂上　チャーシュー、サービス有り難うございました。

哲　へーえ。じゃあ、なんだよ。

奥さん　違ったんです。アーバンは、うちのラーメンを認めてくれたんじゃないかなかったです。

ラーメン屋　ラーメンの種類をふやせて、うちに味噌や塩や豚骨もやれっていうんです……

哲　なんか駄目なのか？

ラーメン屋　あんた、何言うんだ。

哲　え。

沙織　たくさん種類があつたほうがよさそうだけど。

春子　うん。

徳　なんもわかつとらんとう。ラーメン屋の売りはなんじゃ。

奥さん　アーバンは、ただ単にこの商店街から少しでも人が集まる店を無くしたかったのと、うちがマスコミに取り上げられた名前が欲しかっただけなんです。

くやしい……

ラーメン屋　スープなんです。種類を増やすなら、スープもそのラーメンに合わせて、全部作らなければいけません。でも、私ら二人でやる店で、そんなこと



は出来るわけがない。

哲　　なんでなんでえ、人でも何でも増やしてやりやいいじゃないか。

奥さん　味が落ちます。

徳　　食べ物屋の最大の誘惑は、店を大きくすることじゃ。大きくした店は確実に味が落ちるんじや。

奥さん　そのことをアーバンの担当者にもいったんです。そうしたら、これまでそんなことをいった人は初めてだつて。

草脇　これまでもその場所その場所の店引き抜いてたわけじゃな。

奥さん　スープは、業務用のスープ使えば問題ないでしょうっていうんです。

清　　業務用のスープ。

徳　　使ってる店もおおいそうじや。

奥さん　でも、そんなのうちの父ちゃんラーメンじゃないんです。

ラーメン屋　わたしは、わたしは、そんなものを出すくらいなら、ラーメン屋をやめます。

奥さん　あんた。

ラーメン屋　たかだかラーメン屋にも誇りや意地があります。今日、はっきりと話を断ってきました。（泣く）

感動するゲンさん。旦那を抱きしめる。徳さん、奥さんを抱きしめる。徳さん、とてもしつこくて、皆に引き離される。

ラーメン屋　いいなって思ってたんです。なあ。

奥さん ええ、みなさんの歌。

ラーメン屋 それで……

奥さん とりあえず差し入れです。

昭雄 そういうことなら、練習の後、みんなで頂こうじゃないか。

皆口々に、はい、そうだな、など。

奥さん あの出来る限り協力させて下さい。

ラーメン屋 よろしかったら、お願いします。

清 大歓迎ですよ。

哲 アーバン来るなら来い、だ。

徳 うん。

沙織 なんか燃えるわねえ。

春子 うん。

奥さん あたしも燃えてきました。

徳 うん。

徳さん、また、奥さんに抱きつこうとするが皆に引き離される。

昭雄 さあ、もう練習だ。

音楽かかる。皆の踊りの中「ふーん、なるほどね」と思案する新聞記者浮かぶ。

## 十七、商店街さらに活気づく

皆が、地藏祭りの飾り付けを作っている。徳さん、ゲンさん、哲、ラーメン屋もいる。「walkin」聞こえはじめる。  
晶子、足早に登場。

奈津唐 待った。待った、待った。

晶子 なに？

奈津唐 ちよちよ、ちよい。CD出来たんだって？

晶子 ええ。これ。

奈津唐 おお。（ととろうとするが）

晶子 まだサンプル。これにね、Show—天 guys の活動資金一口5000円カンパし  
てくれた人の名前を刻み入れて、大量生産にはいるわけよ。

奈津唐 ああ、なるほどね。

晶子 はい、お金。

奈津唐 え。

晶子 CD欲しいんですよ。お金。

奈津唐 オレ、商店街の幹事なのにな？

晶子 バカ言ってるんじゃないわよ。幹事だからでしょ。そうね、とりあえず百枚ほど持っていていいわ。

奈津唐 なんで？！

晶子 儲かってるらしいわね。一日の売り上げ42万5千362円。

奈津唐 いや・・・、ちよつと大げさに言っただけから。消費税も上がるし。ね。3枚く

らいで。ね。

晶子　ね、じゃない。CD販売担当北沢晶子、売って売って売りまくるわよ。さあ、金よこせ。おら、おら、おら。

奈津唐　ひえー

逃げる奈津唐を追う、晶子。  
パソコンを操作しているキョーコが浮かぶ。アケミが覗いた。

キョーコ　すごいなあ。ヒット数が毎日倍々だもの。

アケミ　本日の書き込みは・・・「商店街の近くに住んでいるものです。先日、練習を見に行きました。汗と熱気、どうしても負けてしまいそうなこんな時代だから、消費税増税大反対、showー天 guys のがんばりに励まされます。デビューライブ、必ず行きます。

アケミ・キョーコ　やったね！

アケミ　あ、キョーコ、あとFBにTwitter　今日は書込んだの。

キョーコ　詳しくなっちゃって。

アケミ　ええ？

電話をしている沙織と哲が浮かぶ。

沙織　こんにちは。地藏通りメルヘン商店街showー天 guys デビュープロジェクト

ルームです。先日、お送りしたご案内は届いたでしょうか・・・

哲　おお、オレ、オレだ。久しぶり。でよ、何人、買ってくれるって。え。50

人、え、5人か、いやいや、ありがてえよ、うんうん・・・

と、昭雄、清、Show-天 guysのメンバー。沙織が新たに合格しメンバーに加わった。稽古がはじまる。

昭雄      ストップ、ストップ。だめだ、子どもっぽくなるな。子どもには子どもなり  
の真実があるだろう。悔しいこと悲しいこと頭にきたこと怒ったこと、これ  
は、それでも歩いていこうって歌なんだ。嘘をやるな。うまく歌うな。続き  
からもう一度。

再びはじまる稽古。

清      いよいよだな。

昭雄      あと一週間だ。

清      仕上がりは？

昭雄      悪くはない、悪くはないが、何かが足りない。

清      そうか。

昭雄      まあ、最後まであぐさ。

さすらいの腹話術師とゴローちゃん登場。

ゴロー     なあ、オレ達さ、この後出番あるの？

腹話術師      どうかなあ。

ゴロー     オレ、踊れるのに。

腹話術師     オレ、踊れないからな。

ゴローダメじゃん。

清 あ の、すいません、ご相談が……

練習が続く中、商店街の人たちが現れて、街角でチラシをまく。

「一週間後、アイドルグループがデビューします」

「地元から生まれたshow—天 guysです」

「地蔵広場特設ステージです」

「是非きてください。地蔵通りメルヘン商店街です。宜しくお願いします」

「なにかやってます。おもしろいことやってます」

「カンパ金、一口500円でCDプレゼント。しかも名前が入ります」

「show—天 guys を応援して地元の誇りにしましょう」  
などなど。

「よろしく願います」の音が響く。真もやってきてチラシを配りはじめた。

## 十八、デビュー三日前、奈津唐の口出し

練習中、メンバーに加え、商店街の面々も勢揃いしている。

昭雄 ストップ。ストップ。音楽も止めて。

音楽止まる。

昭雄 どうした、今の。美佳子。

美佳子 ……はい。

昭雄 君は、今の最後のところ、どうしたんだ。

美佳子 ……

昭雄 ここから見ると、君はまるで手を抜いたようにみえた。いや、手を抜いたんだ。

美佳子 違います。……あの、すいません。

沙也加 あの、違うんです、美佳子さんは……

昭雄 声が出ないから、自分のパートを歌わなかったのか。

美佳子 ……

昭雄 いいか。この曲のラスト、今のところで、君は苦しくても……。どうした。  
(皆の様子を見て) 変だな。

沙也加 奈津唐屋さんが無理して声を出すと声帯を痛めるし、大変だからいいって。

だからそうしたんだ。だから、悪くないよ、美佳子さんは。

奈津唐 ……っていうか、美佳子も音が出なくて悩んでたみたいだし、アドバイス  
をちよつと。

昭雄 勝手に音変えないでください。

奈津唐 ……

昭雄 勝手なことしないでくれよ。音を変えないでください。この曲は、あそこで

あの音があるから成り立つんだ。そういうハーモニーで成立する曲なんだ。あそこで音下げたら、ぶち壊しなんだよ。

清 昭雄ちゃん。オレが許可したんだ。

昭雄 なに。

清 みんな一生懸命やってくれてるし、洋二郎君も本当に美佳子ちゃんやみんなのこと考えていつてくれたんだ。だから、

昭雄 だから？

清 だから・・・、みんなの意見も採り入れて、みんなで作っていけばいいと思っただんだ・・・

昭雄 （メンバーに）おまえらも、みんな、そう思ってるのか。（見物の商店街の人たちに）みなさんも、ですか。

哲 そりゃ、あんたに相談はしなきゃいけねえとは思うけど。

沙織 みんな素人だし・・・。

草脇 でちゅねえ。

アケミ ゲンちゃん。

沙織 すいません、後から入ったのに。

昭雄 わかりました。清、このまえ、まだ何か足りない、オレ、そういったよな。

清 ああ。

昭雄 それ、わかったような気がする。みなさん、一生懸命なの、オレもよくわかります。いや、オレが一番思い知らされて変わった。感謝してます。もう、



清

ここのほとんどの方々は知っていると思いますが、  
昭雄ちゃん。

昭雄

オレは、何の実績もない、昔バンドやってただけの現在プータロウです。この話もらって、最初は小遣い稼ぎになるって思った。そのうち、たまらなくなっってなんとか、自分の仕事として残したい、そう思うようになった。金じゃない。もうははずの金は、みんな寄付しました。（晶子うなづく）でも、今、オレはこれで生きてる、そう胸張って言える。だから、嘘はつきたくない。たしかに、オレも含めて、みんな素人だ。素人だから、嘘つきたくない。自分が最高だと思うものを目指すことに。

草脇

うん。

アケミ

え。

草脇

プロは、どんなときでも合格点を出す。

アケミ

はやいわあ。

草脇

うむ。

徳

プロの板前は体調が悪くても素材が悪くても必ず客が満足するレベルのものを作る。確かに素人はそうはいかん、そうはいかんが、

昭雄

失敗をおそれずに、チャレンジすることは出来る。そう思うんだ。素人だからこそ、少々無茶でも本物を目指していききたい。

徳さん、感激して、昭雄に抱きつく。そこにラーメン屋の夫妻くる。勘違いする。

昭雄  
違うってー。

徳、昭雄にふりほどかれる。それからどの女性に抱きつかうか探してうろろする。女性皆逃げる。仕方ないので、ラーメン屋の旦那に抱きつく。皆、あきれて笑い。

清  
あんまり、うまくいきすぎて、失敗しちゃいけないって、気持ち小さくな

つてたのかもな。オレ、自分で誇りが持てる商店街のシンボルになればいいとかいっというて・・・

哲  
本物を作らなきゃ、アーバンに負けちゃうしな。

浩明  
ちよつと違うんじゃないかな。

哲  
なんだよ。

浩明  
おれたち、アーバンとか関係ないし。

坂上  
まあな。動機はそれぞれって奴です。

浩明、敬子、みち、うなずく。

浩明  
でもさ、オレたちはオレたちで、ちゃんと自己満足しようと思ってたんだ。

坂上、敬子、みち、その通りだ。

清  
それはそれでいい。

春子  
わたし、アーバンが出来た方がいいんじゃないかって思うことあるんです。

皆驚く。

春子 ごめんなさい。この人間でもないのに。わかりもしないのに。でも、ああ

哲 という店が出来たら喜ぶ人もたくさんいると思うんです。駐車場があるし、歩け歩け。

みち うん。ああ、ごめんなさい。私こそ、部外者なのに。でも、私の街にもあり

ましたから。お年寄りとか体の不自由な人、あと小さい子どもがいたりすると、やっぱり便利です。何でも売ってるから一カ所で買ひ物が済むし・・・、ええ、だから、アーバンみたいなところとここみたいな商店街とどっちがいいとか悪いとか、それはお客さんが決めることであつて、そりや生活があるから負けたりしたら困っちゃうんですけど、でもやれることは、私たちに出来ることは・・・

みち 誠実にやれることをやることしかない、かな。年は食つても。

春子 私は若いですけど。

みち おい。

沙織 いいと思うものを作る、いいと思うものを売る・・・

徳 うん。

春子 だから今の話し、やっぱり音程は変えない方がいいんじゃないかつて・・・

ラーメン屋 あの、わたし、おっしやつてることよくわかります。

草脇 商売の基本だな。

奈津唐屋がガバと土下座する。

奈津唐 奈津唐洋二郎36歳、間違っていました。すいませんでした。

キョーコ あと、夢だと思う。夢。夢みたいなこと、わくわくすること、どきどき

きすること、誠実に夢を見てわくわくどきどきすること、違うかしら。

哲 そういうのにぴったしなんじゃねえか。こういうの。show—天 guys

アケミ そうよ、その通り。

古谷あき登場。

あき そうじゃ。

昭雄 おふくろ。

あき わしら死ぬまでいる場所じゃ。自慢できるといいのう。

昭雄 自分の故郷が嫌いな人間はいない。故郷が嫌いな自分が嫌いなだけ、か。あ、ちよつと関係なかったかな。

あき いや。昭雄、ちつとはな、ちつとは変ったか。

美佳子 お願いします。練習させてください。声、絶対大丈夫です。出るようにします。

昭雄 わかった。じゃあ、練習再開だ。

皆 はい。

真が来ていた。

清 真・・・

晶子 真。

真 (昭雄に頭を下げる) お願いします。

猛 真、おまえ……

真 お願いします。

猛 (昭雄にむかい) お願いします。

二人とも頭を下げ続ける。美佳子が続いた。

美佳子 真、もう一度見てあげてください。お願いします。

沙也加、雅美も続いた。「お願いします」

清 おまえら……

商店街の連中も次々に頭を下げはじめた。

「お願いします」徳さん、ゲンちゃんも……。最後に、清と晶子がとうとう頭を下げた。みんな、真の努力を知っていたのだ。

清・晶子 お願いします。

清 今みんなदैいつてた話とちよつとずれるかもしれねえけど、それでも、やっぱり、お願いします。

皆頭を下げている。さすらいの腹話術師も来た。「お願いします」

昭雄 真、だったな。

真 はい。

昭雄　なんで、やりたいんだ。なんで、こんなことしたい。みんながうらやましいのか。

真　うらやましいのもある。あのオレ、猛と学校でも毎日面白くなって、それで踊りとかやったら面白くて、それで・・・

猛　真。

真　でも、ほんとは、ほんとは・・・、好きな女の前で格好つけてえから。ほんとに一生懸命やって格好つけたい。（泣く）

猛　このバカ野郎！

みんなにこづかれる真。

昭雄　よし、練習再開だ。

猛　昭雄さん・・・。

晶子　やっぱり、ダメなんですか。

昭雄　時間がかかるだろう。覚えが悪いんだから、踊りのフォーメーション変わったら。メンバーが一人増えるんだからな。

みな喜ぶ。

清　いいのか、昭雄ちゃん。

昭雄　清、ずれちゃいねえよ。

清　え。

昭雄　この狭い商店街で、毎日、稽古してたの知らないやついないだろう。ほんと

に一生懸命やつてる奴は、必ず結果を出すさ。それに、なによりみんな盛り上がる。

みんな盛り上がる。その盛り上がりの中暗転。

十九、夜。満天の星。商店街の人たちがそれぞれの思いを抱いて明日に思いを馳せている。

祭りを明日に控えた地蔵広場、夜遅くまで皆が準備をしている。

真 明日か。

猛 明日だ。

真 猛・・・あの、

猛 なんだよ。

真 あの、あがとりー。

猛 は？

真 だから、あがとりー。

猛 なに？

真 あがとりー、だつて。

と、いつのまにか沙也加。

沙也加 男のくせに、はつきりしないの。

猛 沙也加。

沙也加 でも、ちよつといいかな。

猛、沙也加いい雰囲気。

真 あれ？ あれ！

三人消えると、徳さん、ゲンさん。

徳 なあ、ゲンちゃん。

草脇 なんですか、徳さん。

徳 あの、ほれ、なんというか……、わくわくするのう。ありがたいのう。  
草脇 明日ですか。どきどきしますね。

二人消えると、敬子、みち、坂上、浩明

敬子 正直言うと、最初こんな企画で何が出来るか、すごく心配だった。疑問って  
感じで。

みち でも、大丈夫だった。いよいよか。

敬子 うん。結果はわからないけど。

みち うん。

浩明 おい、明日テレビ映んじゃねえか。

坂上 ああ、おふくろ、見てるってさ。おまえこそ、腕試しっていったけど、どうだよ。



浩明　おう。ま、やりがいがあったな。

四人消えていく。清、昭雄浮かぶ。

清　もしかしてもしかすると、大ヒットして大ブレイクするんじゃないかなっ

て・・・、もしかしてもしかして、だぞ。最初はそう思ってたんだ。そうなりやいいなつて。だけど、そういうんじゃないくて……

昭雄　わからんぞ。

清　え？

昭雄　特別な奴だと思ってた。夢かなえられる奴つて。でも、もしかすると、そうじゃねえのかもしれないな。

清、昭雄を見てほえみながら消える。いつのまにか昭雄の傍らには春子。

春子　どうこの衣装？

昭雄　いいじゃないか。

春子　アケミさんがほとんど一人でやったのよ。

昭雄　うん。

春子　ねえ、あの星の向こうには何があるのかな。

昭雄　さあな。行けば、

春子　わかるさ。

二人　レッツ　walkin`

春子      なんだか、昔の昭雄さんみたい。

春子、昭雄に寄り添う。昭雄がさらっと逃げて。

春子      あれ？

奈津唐がギターを持っている。

奈津唐      いよいよ明日がデビューか・・・（ギターをポロン）オレじゃないけど・・・

満天の星がそれぞれの思いを照らし出す。

## 二十、地蔵広場特設ステージ The show—天 guys デビュー—！！

ギターの音が聞こえてくる。ブーイングも？ これは奈津唐屋の「いけるぜ僕らの商店街」だ。汗を拭いて声援？にこたえる奈津唐屋が浮かぶ。祭り当日。

奈津唐      ありがとう。ありがとう。地蔵通りメルヘン商店街は不滅です。ありがとう。

みなさん、前座は終わりです。今日は、これからが本番だぜ。イエイ。それでは、その前に、このプロジェクトの仕掛け人。北沢豆腐店経営、商店街会長、北沢清からご挨拶だ。

清      みなさん、今日はこんなに大勢いらっしやっていただきありがとうございます。ごさいます。こんな場所で似つかわしくないかもしれませんがこれだけは言わせて

ください。はつきりいうと我々は、大型郊外店に対抗できる魅力ある町作りに、これまでずっと失敗してきました。今回のこのプロジェクトも、今すぐ私たちの店に、みなさんが、お客さんが押し掛けてくるかどうかということといえば、成功か失敗かわかりません。しかし、私たちは本当に素晴らしいものを手に入れたのかもしれない、そう思っています。皆さん、いつでも私たちの商店街にいらしてください。ここに来れば何かがあります。そう、私たちの心の中に。それから、メンバーのみんな、これまで本当にありがとうございます。君たちに感謝します。

腹話術師・ゴローが登場。

腹話術師・ゴロー Ladies & Gentlemen (師) & おとつちゃん&おつかさん (ゴ) Welcome to Jizo-do-ri park. (師) 皆様、長らくお待ち致しました (ゴ) Just Now. First stage. (師)  
The show—天 guys! It's a show time! (ゴ)  
「walkin'」! (師)

show—天 guysのデビューライブが皆の見守るなかはじまる。曲は、もちろん「walkin'」そして、歓声と拍手のなか終わった。

## 二十一、エンディング

旅支度の昭雄。そして春子。秋晴れの空。一夜明けた地蔵広場。

春子 帰っちゃうんだ。

昭雄 ああ、オレの仕事はとりあえず終わったしな。

春子 ……昭雄さん。

昭雄 また、来るよ。

春子 うん。でも、帰ってきてても、こっちは売れっ子で会う暇なんかないかも。

昭雄 そうだな。そうなるといい。でも、うん、また帰ってこられそうだな。

春子 え。

昭雄 久しぶりにね、久しぶりに故郷に帰ってきた気がするんだ。

春子 それは、きつと違う。

昭雄 え。違うって？

春子 昭雄さんが帰ってきたんじゃない。故郷が帰ってきたの。商店街が、昭雄さ

んの心に帰ってきたの。昭雄さんの心が、大きくなって広がってこの商店街のこと、ここの人たちのこと、わかって受け入れて、だから商店街が帰ってこられたの。

昭雄 そうか。そうだな。

「おーい」と清がああ、の新聞記者をひきずり連れてやってくる。

春子 どうしたの。

清 こいつ、アーバンのスパイだったんだ。

春子 え。

清 ほら、駅前のオレの同級生が、アーバンよく知ってるだろ。そこからわかったんだ。

記者 まあ、お金を頂いて調査していますが、スパイはひどいな。正当な経済行為でしょ。それに地方紙の記者というのも本当ですよ。勘弁してくださいよ。スパイって何をスパイするんだ。

記者 だから、勘弁してくださいよ。

清 おい。

記者 まあ、アーバンは大資本ですからね。リスク調査といえますか……。ほんとに出資するだけの価値がその土地にあるか調査するわけですよ。まあ、結果、今回は見送りになりました。

春子 見送りって……

記者 アーバンは、この土地に出店しないってことです。

清 ほんとうか。

記者 ええ。自信と誇りを持ってやってる地元の商店街とは、喧嘩しない方が特なんですよ。これまでのデータによるとね。金持ち喧嘩せず、ですね。

清 やったー。

記者 それじゃ、そういうことで。（と行こうとするが）あ、そうだ、忘れてました。これ。（と新聞を出す）すいませんねえ、大した新聞じゃないんですけど、え

ー、ここ、ここなんです。

### 三人、新聞を見る。

記者

あの広場でのデビューライブ見せてもらいましたが、うん、悪くなかったなあ。実際ね。それじゃ。

### 夢中で見ている三人をおいて記者去る。

春子

（見出しに）地元の商店街がプロデュース。アイドルグループデビュー。（本文に）「思わぬところからアイドルが生まれようとしている。デビュー曲『walkin'』で彼らは秋祭りの地蔵広場に季節外れの熱さを吹き込んだ。そのグループ名といい売り出しのやり方といい、素人臭さが抜けないが、そこに可能性が感じられる。The Show-天 guys（ショウで一旦切って読むこと）の名前もこのまま行けば、地元の誇りとなるだろう。自信と期待と誇りをのせて、このグループ赤丸急上昇中、要チェック」

昭雄・清・春子

（三人顔を見合わせ）よっしゃあ。

三人の喜びが爆発したところで、再び「walkin'」フィナーレへ。

## 二十二、ファイナーレ

「walkin'」が流れる。Showー天 guysのメンバーが登場。歌い踊る。「実は、わしらも密かに練習してたんじゃ。いくぞ、showー天 guys アダルト!」徳さん、ゲンさん、哲、あき……年寄り連中も踊る踊る、なんてのもいい。商店街のメンバーや他の登場人物も加わって、ファイナーレ。

終





# 「walkin,」 the show-天 guys デビュー曲

let, s walkin, let, s walkin, let, s walkin,  
仕方ない なんてことないよね  
流されたって楽じゃねえ  
時には立ち止まってオーケーさ  
でも だが それでも そしてさ それから やがて  
歩きだそう 胸いっぱい  
いつまで? どこまで? 明日まで  
星が流れる場所まで  
let, s walkin, let, s walkin, let, s walkin,

あとどれくらい どこまで行くのか  
人の波 今日も明日も繰り返し  
でも顔を上げ 止まらない 風を両手で抱きしめて  
吹かれていこう 世界を回れ around the world

let, s walkin, let, s walkin, let, s walkin,  
やれること ないなんて言わせない  
出来ることしかできやしねえ  
仲間がいるから救われた  
でも だが それでも そしてさ それから やがて  
歩きだそう 胸いっぱい  
いつまで? どこまで? 明日まで  
月が微笑んでる場所まで  
let, s walkin, let, s walkin, let, s walkin,

涙こらえて いいじゃないか

海の底 涙も汗もわからない  
飛ぶんじやない 走るんじやない 風を両手で抱きしめて  
歩いていこう 世界を回れ around the world

I'm walker 歩いていこう you, re walker  
何も持たずに let, s walkin,  
両手をフリーに let, s walkin,  
歩いていこう let, s walkin,  
わき目もふらずに let, s walkin,  
let, s walkin, let, s walkin, let, s walkin,  
夜を越えろ

本作品は著作権法によって保護されています。上演、掲載をご希望の方は、作者の許可が必要となります。

連絡先    オフィスプロジェクトM

[info@promstage.com](mailto:info@promstage.com)